東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.35

～特集　地域博物館とボランティア～

パルテノン多摩の「植物標本整理ボランティア」の活動の様子

2014.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目　次

【特集】地域博物館とボランティア ………………………………… 2

●市民活動の成果を博物館の資産にしていくためには？
お茶の水女子大学非常勤講師　菅井　薫　……… 2

●三多摩地域の博物館ボランティア活動
～市民活動の成果を継承し、博物館の資産にしていくには～
くにたち郷土文化館　齊藤有里加　…… 4

●支援団体との協力～大学附属博物館としての課題と試み～
東京農工大学科学博物館　髙木愛子　……… 9

●“学び”から“協働”へ～「古文書整理班」の活動について～
府中市郷土の森博物館　花木知子　…… 11

●多摩六都科学館の市民連携活動としてのボランティア活動
多摩六都科学館　安倍覚子　…… 12

●文化財・史跡ガイドボランティアの立ち上げにかかわって
福生市郷土資料室　青海伸一　…… 13

●パルテノン多摩植物標本整理ボランティア
パルテノン多摩歴史ミュージアム　仙仁　径　…… 14

会員館活動報告（順不同） …………………………………… 15

狛江市立古民家園（むいから民家園）、東村山ふるさと歴史館、東大和市立郷土博物館、府中市郷土の森博物館、町田市立博物館、青梅市郷土博物館、武蔵村山市立歴史民俗資料館、あきる野市五日市郷土館、羽村市郷土博物館、立川市歴史民俗資料館、くにたち郷土文化館、江戸東京たてもの園、国立天文台天文機器資料館、首都大学東京91年館、小金井市文化財センター、檜原村郷土資料館、奥多摩水と緑のふれあい館、たましん地域文化財団、パルテノン多摩歴史ミュージアム、コニカミノルタサイエンスドーム（八王子市こども科学館）、調布市郷土博物館、瑞穂町郷土資料館、福生市郷土資料室、清瀬市郷土博物館、日野市郷土資料館、東京農工大学科学博物館、東京都埋蔵文化財センター、集合住宅歴史館、多摩六都科学館、国立ハンセン病資料館

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿 ………………………… 38

市民活動の成果を博物館の資産にしていくためには？

お茶の水女子大学非常勤講師　菅井　薫

1　はじめに

博物館でのボランティア登録制度のある施設は、登録博物館と博物館類似施設全体を見ると、60%近くを占めている（参考：文部科学省・平成23年度社会教育調査）。1990年代以降は、全国博物館ボランティア研究協議会やボランティアメッセといった、各地のボランティア担当職員やボランティア同士による情報交換の場づくりが試みられた。本稿では、ボランティア活動を始めとした市民活動の成果を博物館の資産にしていくための仕組みづくりについて、先行事例をもとに考えていくことにする。

2　博物館でボランティアを議論することの難しさ

まず、博物館でのボランティア活動を議論するにあたって生じている、主に2つの問題を挙げてみたい。1つ目は、ボランティア活動実態調査（調査設計）の問題である。まず、ボランティア活動の有無を問う設問のワーディングが年々変化している。例えば、「導入・実施の有無」、「個人ボランティアと団体ボランティアを区別した上での導入の有無」、「（登録）制度の有無」、「受け入れの有無」といったような変化である。回答側からすれば、「ボランティアと名づけられた活動」と「ボランティアとは名づけていない活動（傍から見ればボランティア？）」をどのように区別するか、悩ましい。それに加えて、ボランティアの活動内容に関する回答選択肢には、「補助」をつけた項目が多く設定されていたことがある。これでは、ボランティアが職員の手不足を補う存在であることが暗に示されていることになる。

2つ目は、博物館での「ボランティア」をめぐる共約不可能性である（図1）。共約不可能性とは、同じ言葉を使っていても、お互いの拠って立つ仮説・背景が違うために意味が異なって話が通じないことを意味する。

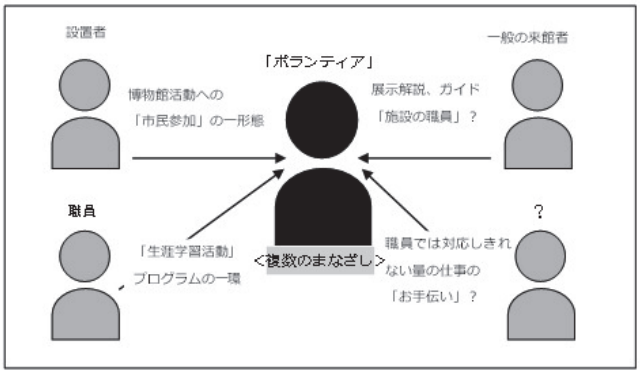


図1　ボランティア観の相違…「同床異夢」

共約不可能性が生じる場面には、次のような例がある。博物館職員が、「人手が足りず、ニーズもあるので、ボランティアの方に展示解説をお願いしたい」と考えているとする。それに対して、ボランティアは、「私は博物館で講座が受けられ、生涯学習をするために来たのに…」、「学芸員のような展示解説はできない」といった反応を示すことがある。しかし、ボランティア観が相違しているのが問題なのではなく、相違に至った背景を互いに知ることが重要となってくる。

3　ボランティア活動からボランティアとは名づけない活動へ

上述のように、「ボランティア」は多くの人に認知された言葉であるだけに、その意味をめぐる議論は尽きない。そこで、あえて「ボランティア」とは名づけない活動を行っているケースもある。例えば、滋賀県立琵琶湖博物館の「はしかけ」制度、国立民族学博物館の「みんぱくミュージアムパートナーズ」、東近江市立能登川博物館の「地域学芸員」、東京都美術館の「とびラー」が挙げられる。

「はしかけ」は、博物館の理念に共感し、共に博物館を作っていこうという意志を持った人のための登録制度である。原則としてグループ（例：うおの会、近江昔くらし倶楽部）に属して活動を行う。「ミュージアムパートナーズ」は、博物館活動を理解し、共に活動を発展させることを目的として発足した。館のウェブサイトでは、「これまでのミュージアムボランティア活動から一歩前進し、メンバーによる自主的な企画・運営を行っていくためボランティアという言葉は使っていません。館員と共により良い博物館活動の実現を目指すみんぱくのパートナーと呼んでいます」という記載がある。「地域学芸員」の始まりは、小さくとも総合博物館（人文系も自然系も）という理念のもと、地域のことに最も住民の需要があるのではないかと考えたところにある。その上で、地域のことは地域の人が一番知っており、協力してもらう地域の人を「地域学芸員」と呼ぶようになった。「とびラー」は、美術館のサポーターではなくて、美術館スタッフと共に美術館活動を作っていくプレイヤーとして位置づけていく取り組みである。

4　博物館活動と市民との関わり：博物館とコミュニティ

ボランティアとは呼ばない博物館での市民活動は、博物館とコミュニティとが関わる活動でもある。広井良典は、コミュニティとは、「人間が、それに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」（広井　2009：10）と定義している。さらに、コミュニティを類別していけば、「生産のコミュニティ」（例えば会社）、「生活のコミュニティ」（地域）、人と人との「関係性」のあり方を基準とする、「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」といった分け方があるという。前者は、個人が非言語的なつながりをもとに結びつき、同質性が前提にある。それに対して後者は、独立した個人間のつながりであり、異質性が前提にある。博物館との関連でいえば、「空間コミュニティ（地域コミュニティ）」や、ミッション志向型、NPOなどの活動を行う「時間コミュニティ（テーマコミュニティ）」が挙げられる。

市民活動団体の育ちを見守る助成プログラム（市民社会創造ファンド「花王・コミュニティミュージアム・プログラム」）では、

次のような市民活動が想定されていたという。

【パターン1】
ミュージアムと利用者団体との重なりが大きい。あるいは、ミュージアム内に含まれる。 （例）ミュージアムの制度としての友の会やボランティア活動
【パターン2】メインターゲット
ミュージアムを拠点としながらも、市民活動団体がある程度独立して活動を行っている。ミュージアムの外での活動も積極的に行っている。
【パターン3】掘り起こし
地域のNPOやミュージアムから独立した利用者団体／市民活動団体が、適宜、協力し合う。
【パターン4】
市民活動として運営されているミュージアム自体の活動

表1　助成対象として想定していたミュージアムと利用者団体との関係性
※上記の関係性にグルーピング化した上で、選考が行われたわけではない。

5　市民活動の成果が継承されないのはなぜか？

第1は、根本的な価値観の相違である。素人が行った調査研究ではなく、専門家によって価値づけられたモノを見ることができる機会をつくることのほうが利用者にとっていいのではないか、といった考え方もある。本来は専門家としての学芸員が果たすべき役割を市民に押し付けているのではないかといった反応が出ることもある。

第2は、活動システムの問題である。

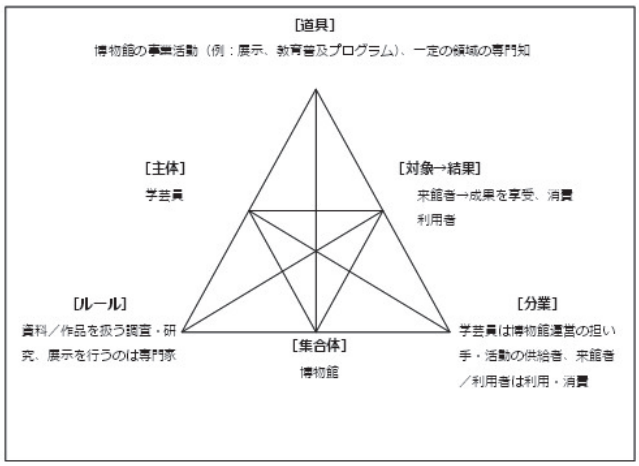


図2　一般的な博物館活動システム

博物館の活動システム（図2）に生じやすいのが、受け入れ体制の問題である。組織の活動システムに組み込まれておらず、専任の担当者がいない場合の展開への制約があり、担当者の異動による影響を受けやすい。それに対して、市民活動を行う組織の活動システムに生じやすい問題が、閉鎖的な運営である。縄張り意識が強く、新規参入者が去っていくことがある。加えて、博物館側の体制や役割に対する理解が欠けてしまうこともある。

6　市民活動の成果を博物館の資産にしていくための試み：先行事例から

最後に、市民活動の成果を博物館の資産としていくための試みを参考例として、2つ挙げたい。1つ目の例は、市民による調査活動をもとにした展示開催、図録の発行を行った、平塚市美術館ワークショップクラブの事例である。当初の活動は、館が所蔵する地域作家の資料の記録・整理・報告書作成であった。報告書作成の過程でメンバーが自分と関連する地域作家の存在を発見し、活動の成果は、展覧会開催、報告書の発行へと結実した。個人的調査から美術館での活動へと発展し、活動や成果の記録化が実践された好例である。

2つ目は、博物館が、地域の施設、コミュニティと共に行う事業で、伊丹市昆虫館「鳴く虫と郷町」の実践（坂本 2009）である。具体的には、「博物館が館外へ出向き、商店会や他施設、団体と連携して開催した事業」である。事業を始めるにあたっては、博物館活動の一環として参加することを第一に考えたのは、特筆すべき点である。しかし、開催後、「市街地活性化」「『まち』の事業」として語られるようになったという。新たなプロジェクトであっても、博物館が行っている既存の調査研究や教育普及／交流活動に、プロジェクトの経験や成果がつながっている／つながっていく回路を意識的に見出す（つくりだす）必要がある。博物館の目的、役割に沿うことを確認した上で、事業活動の一環としてプロジェクトに取り組まなければ、継続性は担保されにくい。

参考文献・資料

広井良典（2009）『コミュニティを問いなおす――つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房.
文部科学省「博物館の在り方に関する検討協力者会議」ヒアリング資料http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/07102509/001/001.htm
坂本　昇（2009）「地域連携、施設連携による事業の展開――鳴く虫と郷町」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』13: 27-33p
滋賀県立琵琶湖博物館「はしかけ制度」http://www.lbm.go.jp/hashikake/
菅井薫(2011)『博物館活動における「市民の知」のあり方――「関わり」と「価値」の再構築』学文社.
市民社会創造ファンド「花王・コミュニティミュージアム・プログラム」http://www.civilfund.org/grant/kao-program.html
台東区文化ガイドブック「東京都美術館を愉しむ」http://taito-culture.jp/culture/tobi/japanese/guide_04.html

三多摩地域の博物館ボランティア活動
～市民活動の成果を継承し、博物館の資産にしていくには～

くにたち郷土文化館　齊藤有里加

1　はじめに

1990年代以降、地域博物館は市民に開かれたミュージアムとして市民グループと博物館のコミュニティが期待され、様々な形で活動が展開されてきた。特に市町村クラスの地域博物館は、資料の収集や教育普及活動において、その土地の文化や環境、歴史を直接伝える市民の存在が不可欠である。

三多摩地域では、1990年代後半から博物館ボランティア制度を取り入れた活動が始まり、2003年には三多摩公立博物館協議会（以下三博協）編集委員会による「博物館におけるボランティア活動アンケート」によって、加盟館10館の博物館ボランティア活動が報告されている（三博協2003）。また市民による地域資料の収集調査活動は各自治体の社会教育事業を背景に、1970年代から行われており、植物標本収集や民具調査等を市民によって行い、博物館開館後、博物館を活動の拠点とするケースも見られる（国立市教育委員会1979；国立市民具調査団・国立市教育委員会1980）。

現在、博物館と市民の活動が円熟期を迎え、活動から20年、30年を迎えるグループも出てきている。活動が長期にわたって展開されるのは、まさに「成功事例」である一方、活動内容に体力が見合わなくなる、メンバーの減少で活動を維持できなくなるなど、博物館で活動する市民の「高齢化」は博物館活動の停滞の大きな要因の一つである。また、長年活動した方が去ったことで、当事者だからこそ知りうる、資料に関連した知識、経験やノウハウが損失し、想像以上に影響が大きいと感じる館も多い。活動で得た知識、情報をどのような形で伝承していくか、新しい世代の市民と新たな取り組みをどのように構築するかが地域博物館の重要な課題である。

2　研究の目的

三博協加盟館のくにたち郷土文化館は、国立市の地域資料を取り扱う地域博物館として1994年に開館し、1995年より「くにたちの暮らしを記録する会」により館の主軸事業の1つである学校団体対応プログラム「民具案内」が行われてきた。開館より19年間（2013年現在）、博物館とともに活動をしてきた市民グループが、高齢化とともにプログラムの継続が困難になりつつあり、これまでの活動の成果を活かしながら、将来的な見直しを行う必要があった。くにたち郷土文化館での市民グループの高齢化の問題には、①博物館と関わる市民グループ組織の高齢化の問題②くらしや文化などの伝承者としての高齢化の問題が内在していると考えられた（図1）。

博物館における市民グループの「高齢化」に伴う、活動の停滞やプログラムの継続の実態は明らかになっていないため、見直しに先立ち、近隣館の市民グループの「高齢化」状況把握、先駆的事例館を調査し、地域市民の人材継承における新たなモデルを開発実践したいと考えた。

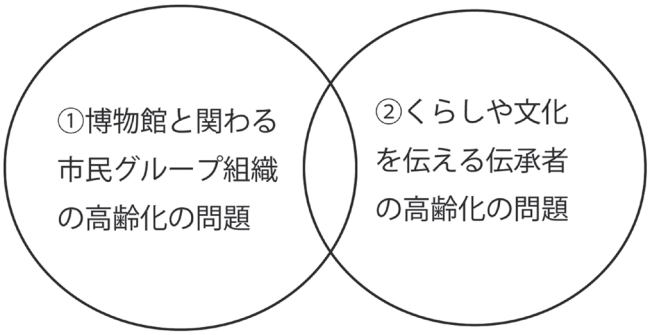


図1　市民グループの高齢化の問題点

本研究では、博物館における市民の高齢化の状況を把握するため、以下の調査、プログラム開発を実施した（2010～2011年実施）。

①三博協加盟館を対象とした博物館に関わる市民の高齢化についてのアンケート調査

②先駆事例館調査（ひめゆり平和祈念資料館・千葉県立房総のむら）

③くにたち郷土文化館におけるモデルプログラム開発

また、2013年9月25日に同研究の成果報告をした三博協研修会の様子を報告する。

なお、本稿における博物館ボランティアは博物館とともに活動してきた市民、市民グループを指すこととする。また、アンケートのデータは2010年当時の物を掲載した。

3　三多摩地域公立博物館へのアンケート調査

三多摩地域の公立博物館を中心とした30館を対象に博物館に関わる市民の高齢化についてのアンケート調査を行った（2010年9月～12月実施）。

質問項目

(1) これまで市民と協働した活動があるか

(2) 市民との活動におけるこれまでの成果

①教育普及活動における成果（自由記述）

②資料研究面での成果（自由記述）

(3) 市民グループの主な年齢層

(4)（博物館と協働する市民について）高齢化をしているか

(5) 博物館に協力する市民の必要性を感じるか

(6)（博物館と協働する市民について）新規活動を検討しているか

(1) は、ボランティア制度に限らず、市民と協働した活動と認識できるものについて記載してもらった（グループ、個人問わず）。各グループを構成する年齢層や、高齢化の判断は担当職員による見解とした。回答内容については後日電話で担当者に内容を確認した。

調査を依頼した30館中27館の回答があった（回収率90%）。17館45件の市民グループが確認でき、グループ規模は個人での協力から100名単位の団体まで幅広く存在した（表1）。活動してい

るグループの高齢化については、回答数15件中11件が「有る」4件が「無し」と回答し、73%が高齢化を感じている結果となった（図2）。活動歴が10年を超える市民がいる館は11館確認された。市民活動の年齢層はジュニアボランティアを設ける科学館が1館あったが、60代以上が79%と全体の傾向として高齢化が確認された（図3）。一方、年齢は高いが、新規参加者が定期的にやってくるため高齢化による活動への影響はないという意見もあった。高齢化以外に活動を停滞させる要因としては人間関係、活動場所の確保、丁寧な育成を行う事が困難などの点が自由記述として挙げられた（表2）。

博物館と市民が関わってきたことで博物館として得られた成果を表3に示す。教育普及面は運営の補助、企画展の企画などの展示制作面での協力体制が挙げられた。開館中に市民が展示室にいることや、教育プログラムに関わること自体が、博物館にとっての成果と認識されていた。また、資料研究面では学芸業務の資料収集から、保存活動まで広く市民の力が貢献されていることが分かった。「博物館に協力する市民の必要性を感じるか」では回答数23件中、20件が「感じる」と回答し、2件が「感じない」1件が「どちらとも言えない」と回答した。（博物館と協働する市民について）新規活動を検討しているかでは回答数20件中、6件が「ある」14件が「なし」と回答した。

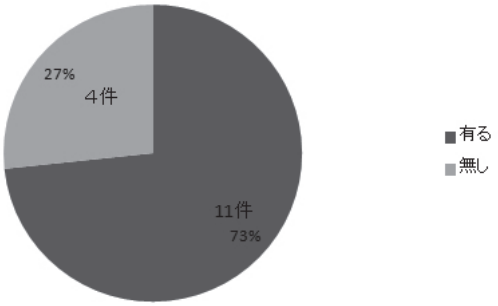


図2　市民の活動グループの高齢化

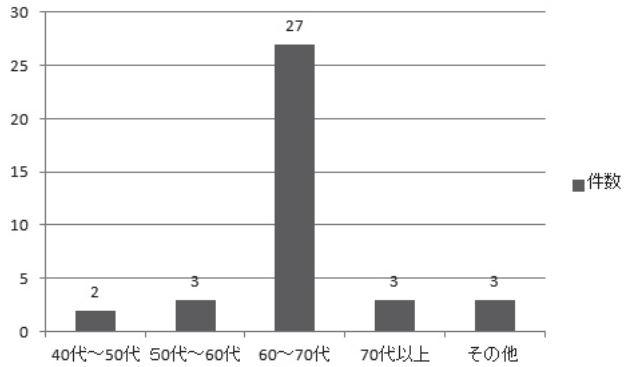


図3　活動の主体となる年齢層（45グループ中38グループ回答）
※主体となる年齢層の判定が困難と回答したものはその他とした。

4　先駆事例館調査

時代の流れとともに継承する事が困難になるであろう「体験・経験伝承」「技術伝承」の先駆事例として、ひめゆり平和祈念資料館（2010年6月2日）、房総のむら（2011年1月16日）の2館へインタビューを行った。

体験した事のない者がどのように引き継ぐか

ひめゆり平和祈念資料館は、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会により1989年開館。ひめゆり同窓生が証言員となって、博物館活動を実施。長年にわたり展示室において当時の状況を語ってきたが、やがて展示室に立てなくなる時期を見据え、「生存者による語りつぎができなくなった時のために」として展示の改修・次世代の育成を実施。①世代の違いをとらえることの大切さ②映像による消えゆく記録の残し方③あえて展示パネルの文字を増やすなど、過去を伝えるための効果的な手段について話をうかがった。受け手の世代の違いにより、語った内容が異なった印象で受け取られる場合があること、引き継いでいく際にその点をお互いに認識、共有しながら行うこと、業務の合間を利用し負担にならない工夫が重要であることが分かった。

写真1　ひめゆり平和祈念資料館の活動の様子

技術伝承をどのように残し、来館者に提供するか

千葉県立房総のむらは1986年に開館した。年間350種類以上の演目を準備し、伝統的なくらしや道具、モノ作りの技を保存・継承している。伝承形態として技術員、伝承者を配置した体系を取り、活動上のこだわりとして、「地域性」を重視した継承を行っている。博物館経営の側面から、来館者に人気のないものは淘汰されていき、技術員に受け継がれないものも出てくるため、これらの技術については、伝承者の作業の様子を映像で記録したり、聞き取りによって文字記録を残したりしている。また、体験プログラムの実施記録をとるなどの形で残す取り組みを行っていた。

5　くにたち郷土文化館における、他世代との連携プログラム開発

くにたち郷土文化館の民具資料は約30年前より市民の手で収集されたものである。現在も、使用されていた当時の様子を直接知る市民が教育普及に関わっており、博物館で活動する市民の消失は、収蔵資料の情報（特に民具の使い方の情報）も共に失う事であり、何らかの情報記録が必要であった。そこで、聞き取りを映像で記録し展示へ活かすプログラムを開発した。「民具再発見プロジェクト」とし、民具使用の経験のない他世代を取り入れた形を試みることとした。

結果として、「ねこごたつ」の使い方をテーマにした約10分の映像が出来上がった。一般的な文献に書かれている使い方以外のねこごたつのありようや、燃料の扱い方など、体験者からの話を聞き取ることができた。民具のある生活が抽象化していく中で、映像によって具体的な形での記録を残し、有効な記録方法となることが確認できた。出来上がった映像は企画展示室内において展示し、小学校の民具案内対応において活用した。また、当館でこれまで行ってきた展示の内容や、今回のプロジェクトで聞き取った内容を元に小学生向けの冊子を制作した。

今回のプログラム実施の際、あえて他世代を意識し、大学生をメンバーに入れることを試みた。課題は残るが、年の離れた若い世代に話すことは高齢層にとってむしろ話し易いのではないかという印象があった。学生層はポテンシャルが高く、行動力がある一方で、長期的な活動には参加しづらい傾向がみられ、テスト期間や就職活動、留学等様々な事情がある事が分かった。1サイクルが短いと参加しやすいと考えられ、今後の参考にしたい。

写真2　聞き取りと映像記録化

写真3　「むかしのくらし展」で映像を見る小学生

6　三博協研修会における成果発表とワークショップの実施

これまでの研究結果を三博協研修会（2013年9月25日実施）において報告した。研修会では同報告に加え、江戸東京たてもの園のボランティア活動を見学、博物館ボランティアに関する基礎理論を江戸東京たてもの園インターン菅井薫氏にお話いただき、ワークショップ（ワールドカフェ）を実施した。加盟館32館中16館34名の参加者が集まり、博物館と市民活動に関する事例が学芸員にとって重要な関心事であることがうかがえた。評価アンケートではテーマへの関心について「非常に興味深い」（74%）、「やや興味深い」（26%）「あまり興味がない」0%、「興味がない」0%（有効回答数31）となった。ワークショップについても「非常に効果があった」（73%）「少し効果があった」（７%）「あまり効果がなかった」（0%）「効果がない」（0%）（有効回答数26）となった。また、他館の職員と交流しながら情報交換ができる場があったことについて評価する自由記述が多数あった。

ワークショップのテーマ設定は、「博物館の活動に市民が興味を持って参加してもらうにはどんな方法がありますか?また、どんな活動なら参加してもらいたいと思いますか?」とし、広い範囲で語れるよう配慮した。一方「高齢化に関する話題をもっと掘り下げたかった」という意見もあり、高齢化が館種に問わず共通の課題であることを感じた。また、ワークショップの手法そのものが学芸員の研修に有効であるとの意見も多く得られた。お互い近隣に博物館がありながら、情報交換をする余裕がなく、双方向性のある研修会を行う事によって、他の学芸員の意見やアイディアを効率的に持ち帰ることができる。「やりがいのある企画をたてる」「参加者に身近なテーマを決める」「広報が重要」「大学に呼び掛けてみては」などの具体的なアイディアや「担当者の負担の軽減」や「課題の共有の必要性」などの運営面も話題となった。

写真4　ワークショップを通じた学芸員の情報交換

7　おわりに

今回の研究では、博物館における市民活動の高齢化を切り口に、館内での他の世代への継承を試みた。アンケートではほとんどの館の市民活動グループが60代以上であった。プログラム開発では、映像という手段で、現在の活動グループを学生層とつなげることで、資料を残しながら活動に刺激を与えることができると感じた。また今回の研究では、市民活動の継承手法について検討したが、今後市民が関心を持つ分野については未調査である。これまで行ってきた活動を継承しつつ、これから始め

る活動をどのように展開させていくか、三多摩の各館と情報交換をしながら市民との協働を進めていきたい。

謝辞

調査に当たり三多摩公立博物館協議会加盟館、ひめゆり平和祈念資料館、千葉県立房総のむら、くにたちの暮らしを記録する会の皆様にご協力をいただきました。プログラム開発ではくにたち郷土文化館にご協力をいただきました。学芸員安斎順子氏、髙橋秀之氏（現日野市立新撰組のふるさと歴史館）には心より感謝申し上げます。本研究は、平成22年度笹川科学研究助成を受けて実施いたしました。深く御礼を申し上げます。

引用文献

三多摩公立博物館連絡協議会（2003）「博物館におけるボランティア活動に関わるアンケートー結果報告ー」、三博協編集委員会編『ミュージアム多摩　24号』17-19ｐ

国立市教育委員会（1979）『国立の野草いろいろ』135-136ｐ

国立市民具調査団・国立市教育委員会（1980）『ーくにたちの民具①ー国立第一小学校収蔵の民具』45-55ｐ

博物館名	グループ名※(　)内は活動開始年	グループ規模	活動形態	主な年齢層	最高活動年数
東村山ふるさと歴史館	①伝統食の会　・古文書を読む会 ②機織講座・しめ縄マスター ③はちこっくめいと(H20)	10～20名	学習兼ボランティア 学習講座スタイル	60～70代	
府中市郷土の森博物館	①博物館ボランティア（7グループ）（S62） ②府中天文同好会、府中市茶道連盟など	1名～83名	ボランティア、その他	60代	23年
青梅市郷土博物館	青梅市文化財解説ボランティア（H15）	15名	ボランティア	60代	8年
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山郷土の会（S56）	3名	有志	70代以上	27年
あきる野市五日市郷土館	あきる野市市民解説員（H10）	62名	ボランティア	70代以上	12年
羽村市郷土博物館	①玉川上水展示説明員 ②里山まる山の会 ③羽村古文書研究会	10名～15名	有償ボランティア・ボランティア	50～60代	20年
清瀬市郷土博物館	①清瀬市郷土博物館友の会（S60） ②ケヤキロードギャラリーを愛する会 ③うちおり研究 ④収蔵品整理 ⑤はたおり伝承の会	①145名 ⑤40名	友の会・ボランティア	60～70代	25年
日野市郷土資料館	①日野市制50年のあゆみ（H22） ②中世の謎―幻の大寺院・真慈悲寺を探る（H21） ③勝五郎生まれ変わり物語（H18） ④七生丘陵の自然とくらし（H20） ⑤日野市域野古文書調査 ⑥民具修理ボランティア	③42名 ④18名	ボランティア	60代	20年
小金井市文化財センター	①小金井桜の会 ②古文書の会 ③湖人読書会 ④機織り体験教室協力（展示品による）	5名～25名 個人3名			10年
くにたち郷土文化館	①くにたちの暮らしを記録する会（H6） ②植物標本の会（H6） ③国立市動物調査会（H6） ④各事業の指導者（星空ウォッチング、折り紙教室、陶芸教室等）	①～③各20名程度	市内自主グループとして活動	①60～70代 ②70代以上 ③50代、40代	16年（※30年） ※開館以前の活動
東大和市立郷土博物館	①東大和市狭山緑地雑木林の会（環境整備・創出など） ②環境教育ボランティア（学校授業対応協力） ③星空ボランティア（講座補助）	①60名②20名③15名	ボランティア	①60代 ②40～50代 ③40～60代	14年
パルテノン多摩歴史ミュージアム	①植物標本整理ボランティア（S62） ②定点撮影プロジェクト（H19） ③古文書ボランティア（H16） ④石仏ボランティア（H19～H22） ⑤くらしの調査団（H21） ⑥機織りボランティア（H22）	10～20名程度	ボランティア	60代	23年
東京農工大学科学博物館	友の会伝統工芸会（S55）	249名（各グループ20名程度）	その他 学習の機会と一般市民に楽しんでいただく講習会を実施	40～60代	5年（任期制）
江戸東京たてもの園	ひじろ会（H8）	180名（グループ内に各種自主活動グループがある）	ボランティア	60代 （60代以下も定期的に入る）	
多摩六都科学館	多摩六都科学館ボランティア会（H12）	97人	ボランティア	20～70代以上 ジュニアボランティア制度がある	11年
八王子市こども科学館	八王子市こども科学館ボランティア（H16）		個人で時中に来館	60代	
国立天文台天文機器資料館	①天文学史研究グループ ②標石グループ等		ボランティア		

※データは2010年に実施した時のもの。名称等はアンケートに記載のまま掲載。下線は開始から5年以内の活動。

表1　東京都三多摩博物館協議会加盟館における市民活動グループ一覧（個人含む）

高齢化についてのコメント	1　新規募集をかけても高齢の方しか申し込みがない 2　入ってきても同年代中心となる 3　新規会員もおおむね 60 代以上と思われる 4　10 年前と同じ体制での活動が難しくなった。自主グループのため、博物館主導での採用や調整はできない。 5　活動の PR によって新しい人の流入はある。年齢は 60 代が多い。開館前から前身のグループがある団体は、新しいメンバーへの幹事引き継ぎ等が難しい様子だ。 6　任期制のため学生ボランティアや現役社会人の方も入会しており、高齢化しているとはいえない 7　高齢化ほどの時間はたっていない 8　特に困っていない。高齢ゆえに蓄積された知識を還元してほしいと願っている。
高齢以外に活動が困難になる理由	1　会員間の不協和音 2　人間関係 3　民具を通して、地域ならではの話をできるのが、当館の強みだが、農業という産業自体が市域から消えかかっており、適切な人材確保が困難。 4　同じ年齢層でも他地域から来られた人も多く、昔の様子を話せるとは限らない。 5　施設縮小による活動場所の確保 6　丁寧な育成が困難 7　それぞれの活動開始の経緯が異なるため、管理対応が複雑な面がある 8　博物館機能と活動の方向性の調整が今後の課題

表2　高齢化についてのコメント

教育普及活動における成果（自由記述）	1　各種博物館事業への協力 2　博物館の展示、資料への理解促進 3　生涯学習の場、そしてコミュニティ拠点として博物館の存在意義を高めることができている。 4　団体への解説を始め、日々の解説活動により、職員の負担が減少した 5　講座などへの参加者増加 6　来館者の求めに応じた展示解説を行う事が可能になり、来館者のニーズにより対応できるようになった 7　玉川上水展示説明員 8　受付、監視員の確保、ロードギャラリーの清掃管理、企画展の実施 9　小中学生を中心としたはたおり体験学習 10　市民による教育普及プログラム及び、学校団体対応 11　共催展示 12　講座、学校授業への協力等 13　共に調査したデータを企画展等の中へ還元できる 14　日本の伝統工芸を学習し、伝承する目的で設立された「伝統工芸会」によって現在多くの市民にその技術と知識を学習していただく機会を与えることができた。 15　ハンズオンコーナーにおける科学コミュニケーションの実践。サイエンスラボ等の科学教室は地域のマンパワーによるもの 16　来館者に対する展示物の説明、ボランティアメンバーによる工作教室の開催 17　あきる野市民解説員は教育委員会の認定学習ボランティア。学芸員の配置がないため、大きな役割を担う
資料研究面での成果（自由記述）	1　村山絣の復元 2　学芸活動に対する市民の目線からみた刺激となっている。 3　展示資料の解説補助カードの作成により、簡潔な基礎資料ができた。 4　歴史に残る文化財の掘り起こし、聞き取り調査等におけるサポート 5　各種の情報を入手でき、調査活動に協力していただける 6　羽村古文書研究会 7　収集から始まり市指定有形民俗文化財までにすることができた。 8　企画展図録を発行できた。収蔵庫整理の協力 9　古文書の会の解読による市史編纂資料としての研究 10　5,000 点の民具資料・古民家の移築 11　400 点の植物標本 12　国立の生活誌聞き書き 13　国立市内石仏調査 14　古文書の解読、植物標本資料の充実（目録の作成など） 15　組みひもや、わら工芸、藍染めなどの技術を蓄積し、様々な作品を創作している。これらの作品の一部は博物館資料としても保存している。 16　雑木林の生態系研究など、科学館の教育スタッフと主に地域を題材とした研究、資料採集が行われた。

表3　博物館と市民が関わってきたことで博物館として得られた成果

支援団体との協力
～大学附属博物館としての課題と試み～

東京農工大学科学博物館　髙木愛子

1　はじめに

東京農工大学科学博物館では、「博物館友の会」と「繊維技術研究会」、博物館支援学生団体「musset（ミュゼット）」という3つの団体が、精力的に活動を行っている。特徴的な活動として外部からも注目されているが、長年の活動の中、大学附属博物館としての特殊な事情も相まって課題も山積している。本稿では、これらの課題と博物館リニューアルに伴い実施している試みについてまとめた。

2　東京農工大学科学博物館の概要

東京農工大学科学博物館（以降、博物館）は、明治19年、東京農工大学工学部の前身である農商務省農務局蚕病試験場に設置された「参考品陳列場」を起源とする。以後本学部は、各時代の要請に応じた養蚕・製糸教育を行い、現在はバイオテクノロジー、機械工学、エレクトロニクス、情報工学など、多種多彩な教育・研究へと発展している。

博物館も附属施設として、母体組織の発展と伴に、取り扱う資料を参考品から蚕糸業全般、繊維関連全般と対象を広げ、収集・展示に努めてきた。昭和27年には、博物館法に基づく「博物館相当施設」に指定されている。平成20年に改組が行なわれ、工学部附属から農学部の資料も合併した全学組織となった。併せて本学の様々な教育・研究活動の広報の場としての役割が付加され、参考品陳列場から120年以上にわたり収集されてきた繊維関連資料群の一般公開とともに、本学の最新の教育・研究成果の情報発信を行っている。

3　支援団体としての位置づけ（博物館友の会を通して）

東京農工大学科学博物館友の会（以降、友の会）は、昭和55年に博物館の意向により一般市民を中心として発足し、現在約300名が入会している。発足翌年から開始されたサークル活動は、3年間かけて技術を学び、4年目に下の学年に指導することで、自らの知識と技術を伝承する方法を採用しており、現在は絹や手紡ぎ、織物、藍染など、繊維に関する11サークルが活動を行っている。

発足以来、博物館の所属団体として博物館の指導・管理の元、活動を続けてきた友の会だが、平成16年の本学の国立大学法人化に伴い、博物館側による友の会の会計事務の取り扱いが禁止され、別組織として自主的な運営が迫られることとなった。そこで、友の会会則を改正し、会員より選出される諸役員が各事項を審議し、総会によって決定される独立した体制が整えられた。しかし位置づけが外部の任意団体となったことで、今度は外部団体が大学施設を無料で使用している点が大学の規程に反することとなった。また、団体名に「東京農工大学科学博物館」が掲げられていることから、大学側では友の会活動の万が一のリスクを懸念し、危険視する傾向が強まった。

別組織となっても、博物館と友の会との協力関係は不可欠である。しかし博物館の運営規則には、外部団体への対応について記されていなかった。そこでこの度、博物館と友の会の関係性を再検討し、双方の規則改正を行った。友の会を「博物館支援団体」として位置付け、友の会の活動内容の審議、友の会活動の支援、施設提供などを博物館業務の一環とした。併せて友の会会則を、博物館に対する支援活動を重視した内容に改正

写真1　友の会サークルが製作した作品（作品展より）

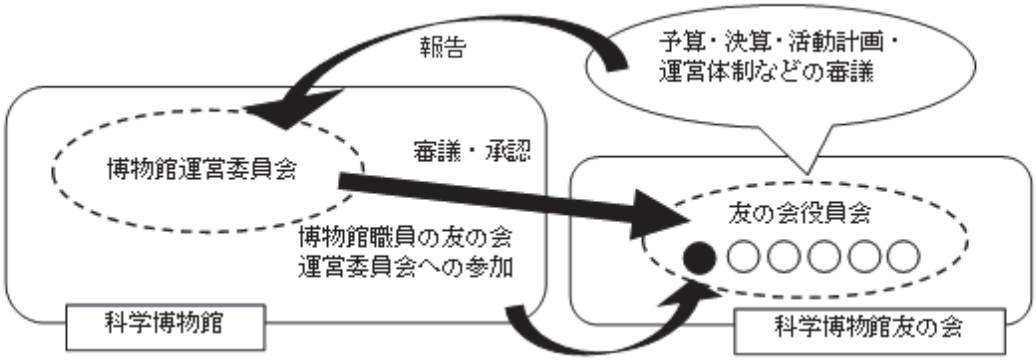


図1　博物館と友の会　概念図

し、支援団体としての位置づけを強化した。また、友の会役員の一人として博物館職員が運営に携わるとともに、友の会の活動計画は博物館運営委員会にて審議・承認を行うことで、最高意思決定機関を博物館運営委員会と定めた。

以前の友の会は、サークル修了とともに退会する会員も少なくなかった。そこで引き続き会員として、習得した技術を博物館で活かせる企画を行っている。今後は、定例のボランティア活動を増やしていくことで、博物館支援団体としての関係強化を図っていく。

4　グレーゾーンのボランティア（繊維技術研究会を通して）

繊維技術研究会（以降、技研）は、本学卒業生を中心とした繊維関連メーカー技術者OBGなどにより平成11年に結成され、現在約30名が所属している。技研も、友の会の改正とともに支援団体としての位置づけを行った。主に、博物館が所有する繊維機械類の保守・運転を担当しており、毎週火・土曜日に実施されている大型機械の動態展示は、博物館の目玉となっている。また毎月第3火曜日には、会員が各自の専門分野についての講演会を実施するなど、会員の持つ技術や知識は博物館にとって掛け替えのないものとなっている。

この度、機械の動態展示の副産物である糸や布類を、ミュージアム・グッズとして販売できないか検討を行った。その結果、原価計算にあたりボランティアという存在を大学の規程中で位置づけることができず、業務委託契約を交わすことが求められた。しかし、ボランティア団体と業務委託契約との整合性が取れないなどの疑義があり、技研側と博物館との間で話し合いが進められている。支援団体という枠組み設けたものの、実質的にはグレーゾーンのままであることを痛感させられることとなった。

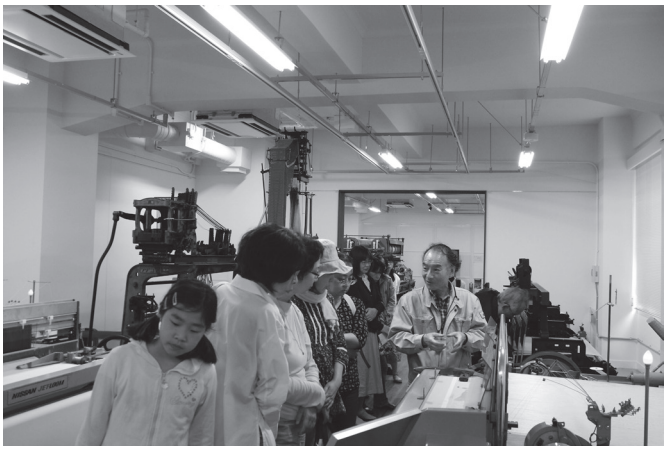


写真2　技研による解説と動態展示

博物館では広く受け入れられているボランティア組織も、大学では途端に位置づけが難しくなる。他の大学附属博物館もグレーゾーンで運営しているのが実情である。しかし、会員の平均年齢が70歳を超える技研にとって、急務の課題である後継者の人材発掘・育成においても、また今後の博物館と支援団体の更なる連携活動においても、支援団体の不明確な位置づけは、常に課題として持ち上がることは明白である。根本的な解決策はまだ見いだせていないが、今後も模索を続けていく。

5　今後への期待（博物館支援学生団体「musset（ミュゼット）」を通して）

博物館にとっては掛け替えのない支援団体でも、大学側がその実績を十分認識しているとは言い難い。大学附属という特殊な環境において、まずはその実績を博物館から内外へ積極的にアピールしていくことが重要であると考え、博物館と支援団体で連携した活動を増やしている。

また平成25年度からは、現役東京農工大学生約20人が集まり、博物館支援学生団体「musset」（以降、musset）をスタートさせた。主に展示解説を担当しながら、イベントの企画・実施なども精力的に行っている。学生の視点から博物館を盛り上げてもらうとともに、支援団体という枠組みを通して、学生の全人教育に寄与することを目的としている。

最近では、mussetメンバーが技研の講演会に参加したり、友の会のワークショップを手伝ったりと、積極的に交流を求めるようになり、友の会や技研にも良い刺激になっているように感じる。彼らのこうした地道な活動が、学生内での博物館や支援団体のアピールに繋がると期待している。また、今後は性質も年代も異なる3つの支援団体間の連携を更に深めることで、多世代の化学反応を生みだし、博物館の新たな発展へと繋げていきたいと考えている。

写真3　mussetによる実験教室

“学び”から“協働”へ
～「古文書整理班」の活動について～

府中市郷土の森博物館　花木知子

東京ドーム約3個分の13.7ヘクタールの敷地に、博物館本館と8棟の復元建築物、及び四季の草花を有する府中市郷土の森博物館は、多くのボランティアの協力のもとで運営されている。2000年（平成12）度から本格的に始動したボランティアグループは、現在「資料整理班」「体験学習班」「復元建築班」「園内景観班」「古文書整理班」「展示解説班」「天文班」の7つを数える。ここに所属する計100名のボランティアが、担当職員と連携しながら、園内景観や復元建築物の維持管理、博物館における展示や学習の場で活躍している。

これらのボランティア活動は、市民協働による博物館の事業運営を目的としている。このため、各グループの活動内容を市民に周知することに努め、希望者には常に門戸を開いているが、「古文書整理班」だけは当館が実施している古文書講座の修了者を対象としている。これはその活動において、第1に古文書の読解能力が必須であること、第2に府中市の歴史に関する知識が必要であること、第3に個人のプライバシーに関わるものなど留意すべき史料を取扱うことを鑑みたためである。その結果、博物館が提供した「学び」の場とボランティア活動が繋がることとなった。今回の「地域博物館とボランティア」というテーマにあたり、この「古文書整理班」について紹介したい。

当館の古文書講座は、府中市域に残る江戸時代の史料をテキストに、古文書の読解と府中市の歴史を学ぶ通年の講座で、月に2回実施している。初級編と中級編があり、初級編は講義形式で崩し字の読み方と史料の解釈を学び、中級編はゼミ形式で受講者が史料を読解し、関連事項を調べて発表する。リピーターが多いことから、初級編は3年、中級編は2年という受講年限を設けているが、長期にわたり継続して学ぶことができるのは、当館の古文書講座の大きな特色である。

実は、当館最初のボランティア活動は、古文書講座の年限を満了した人たちからスタートしている。他のボランティアグループが形成される2年前の1998年（平成10）度に、もっと深く古文書や府中市の歴史に関わっていきたいと望む講座修了者が、担当学芸員と相談のうえ、古文書の整理に携わるようになったのである。それから約15年を経た現在、「古文書整理班」は3グループ34名に及ぶ。

古文書整理作業は、講座では実際に触れることのなかった原史料を取扱い、多種多様な史料の内容を要約し、情報を記載していく。順不同のものは並べ替え、一部分しか残存していないものからも内容を読み取らなければならない。江戸時代の史料に加え、明治から昭和にかけてのものも多く、字体や表記の方法など新たな知識を習得することが必要になる。ここにおいて、講座修了者は、持っている知識を活かしながら、新たなことを学び、次のステップに進むことができる。一方当館には、受講者の学びの成果が、ボランティア活動を通して還元されている。このように、館にとっても古文書整理班にとっても良いサイクルが形成されていると思うが、当館としては更に進化した関係を目指したいと考えている。それが、本論の題とした「“学び”から“協働”へ」なのである。

全てのボランティアグループに共通することだが、活動は楽しく遣り甲斐があることが前提だろう。「古文書整理班」のメンバーは、古文書の解読により明らかになる歴史的事実を楽しみながら活動している。けれども、時には領収書の束や、身近な時代である昭和期の史料群にあたることもあり、これらの整理はあまり楽しいものではないかもしれない。また、学び得ることが少なく物足りなさを感じるかもしれない。しかし、それらも古文書整理には必要な作業なのである。

当館では、このような際にモチベーションを保ってもらえるよう、意見を交換しながら、古文書整理が後世に史料を継承する重要な作業だと理解してもらうことに努めている。博物館とボランティアが協力し、市民の共有財産を次世代に引き継ぐ活動にあたっているという意識のもと、ともに活動していきたいと思っている。「学び」からスタートした芽が、ボランティア活動に参加することで蕾となり、館とボランティアとの相乗効果により開花する、それこそが本当の協働であると考えるからである。

「古文書整理班」（水曜日班）の活動の様子

多摩六都科学館の市民連携活動としてのボランティア活動

多摩六都科学館　安倍覚子

多摩六都科学館では、開館7年目の平成12年10月にボランティア制度が発足、平成24年度にはボランティア会として会則を持つ独立した会となりました。平成26年1月現在、一般ボランティア92名、ジュニアボランティア15名が登録し、以下の活動をしています。

【展示室、科学学習室アウトリーチで活躍】

当館の5つの展示室は、Do　Science!　をテーマに、体験型展示を展開し、その内4つの展示室内に「ラボ」と呼ぶ実験・観察・工作スペースが平成25年3月のリニューアルで新たに設置されました。

そのひとつの「からだラボ」はボランティア会が主体となって運営をしています。パズルや知恵の輪などを常設している他、日によって、数あてゲーム、折り紙、工作などオリジナルのワークショップが加わり、ボランティアが日々その力を発揮しています。その他の3つのラボは科学館スタッフが主体となって運営していますが、ボランティア会メンバーも、科学館スタッフの行うワークショップのサポート以外に、独自にワークショップを企画し、開催することもあります。

写真1　からだラボでの活動

展示室4「自然の部屋」には、「ツリー展示」という容易に展示内容を更新できるフリーな場所が4ヵ所あり、このうち1ヵ所の管理、運営をボランティア会メンバーが担当しています。
年の初めには蠟梅、夏にはセミ、秋にはカラスウリというように、季節の植物、鳥、昆虫、図鑑、説明パネルなどが日々更新されています。

展示室だけでなく、庭に出て、雑木林にいる昆虫や鳥についての解説をするミニ観察会の開催も行っており、お客様に「旬」を感じてもらい、展示室と自然、お客様と自然をつないでいます。

さらにボランティア会では、月に一度、2時間程度でじっくり取り組める科学教室を開催。企画から予備実験、教室開催までを独自に行っています。

学校や児童館、図書館等からの依頼で「出前教室」を行うこともあります。

【ジュニアボランティアの活動】

当館では、大人のボランティアや当館スタッフの良いところを吸収し、社会性と教養を身に着けることを目的として、ジュニアボランティア制度を導入しています。5年生から高校3年生までが、各自の都合に合わせた日程で活動をしています。一日の活動を振り返るシートを毎回書いており、活動内容、得たこと、感じたこと、提案などを記入するこのシートには、大人とは違う視点の興味深い記載もがあり、参考になります。

写真2　しくみラボで「はんだづけコーナー」

【バランスのよい関係を目指して】

これまで述べてきたように、当館のボランティアの活動は、館内で大きな役割を果たし、なくてはならない存在となっています。同時に、当館は、ボランティアの方々に「活動の場」（社会とつながる場）を提供していると言えます。ボランティアは市民という立場で当館を地域活動の拠点として活用し、自己のネットワークを広げることができます。

当館としては、独立した組織であるボランティア会の活動に対し、「ボランティア活動支援・育成事業」として、新ボランティア募集活動や、科学教室の応募受付業務、教室やワークショップに必要な経費の負担や広報活動等の支援を行っています。

ボランティアの活動意志をどのように科学館側がくみ取り、支えられるかが、さらなるボランティア会発展のカギとなり、延いては多摩六都科学館発展のカギとなります。これを課題とし、今後もボランティア会とのバランスのよい関係を保っていくことを目標としています。

文化財・史跡ガイドボランティアの立ち上げにかかわって

福生市郷土資料室　青海伸一

福生市郷土資料室では、平成25年度より文化財・史跡ガイドボランティアを立ち上げ、活動を開始しました。今回、これまでの経緯の報告と、活動を始めて見えてきた課題について報告したいと思います。

養成講座の始まりは平成21年度でした。地域の歴史や文化に関心のある市民に対する学習支援の一つとして、市内の史跡めぐり等における文化財・史跡ガイドボランティアを養成することを目的としました。

写真1　養成講座の様子（拓本による板碑の調査法）

21・22年度は初級編として、福生の歴史を通史的に学ぶ講座や福生の歴史に関連する市内外の遺跡・博物館などへの見学会を中心とする教養講座的な内容で実施しました。そして私が資料室勤務となった23年度から24年度にかけ、中級編として資料の調査方法や具体的なガイドをする際の技術や心構えなどを学べる講座を企画し、参加者が実際にガイドとして活動を始める下地作りを行いました。

私は資料室に異動してくるまで約10年間、東京都江戸東京博物館で展示ガイドボランティアの経験がありました。そこでゼロからボランティアを立ち上げるにあたり、体験から得た技術的なことや心構えなどを伝えることにしました。また、具体的なガイドのイメージを持てるように、自身がガイド役となって1つのモデルとして案内を行うなど、どのような活動をしたら良いのかがはっきりしない受講者に、その道筋を示すよう努めました。

そして、4年間、50回を越える講座を経て、平成25年度、いよいよ具体的な活動を行うことになりました。はっきりとした活動内容が定められているわけではなかったため、皆で集まり、モデルコース作りから始めました。また、多くの方がガイドツアーに参加できるよう、文化財ウィークの事業として取り組み、1つは郷土資料室の企画展示と関連させて展示の舞台を実際に歩くガイドツアーを、もう1つは市内の文化財めぐりとして実施することになりました。

ガイドをする側にとって初めての体験です。当初予定したコースは時間通りに回れるのかといったことも含め、実際に予行練習も行いました。当日は私も担当者として同行し、ハラハラしながらも見事にガイドをつとめあげるボランティアの方の姿にほっとしたものでした。

ボランティアといっても、私よりも地元に長く生活する大先輩方です。私が行うガイドツアーでは、私の学んだ範囲での知識の受け売りにしかなりません。しかし、さすがは地元の方。話の内容は実生活に根ざしており、聞いていて、そうだったのかと思うことが多々あります。ちょっとしたコツを伝え、最初の一歩を踏み出す勇気さえ持てれば、あとは経験と慣れの世界だということは私自身の体験からも知っています。そのお手伝いをすることが私の役割だと改めて思いました。

写真2　ガイド当日の様子

今年度は3月にも特別展示に関連させたガイドツアーを実施し、26年度の予定も話し合いで決まりました。

ガイドボランティアとしての経験をつめば、おのずとガイドするコースもある程度決まってきますし、当日の役割分担など体制もしっかりとしてくるのではないかと思います。また、自主的な活動も盛んになっていくことでしょう。しかし、福生市のガイドツアーはまだしっかりとした形が整わない中、担当する私自身のボランティアとしての経験と博物館職員としてこうあってほしいという想いで、ガイドの方をサポートしながら方向付けを行っている段階です。

当面の課題としては、ガイドとして話をできる人がまだ限られているため、登録者全員がガイドとして話ができるようになってもらうことと、活動機会の確保や活動内容の充実を図り、勉強会の充実等を通して活動を軌道に乗せることです。

立ち上がったばかりのガイドボランティアです。各地のボランティアの方々との交流なども持ちたいと思っています。その際には、皆様からのご指導をよろしくお願いいたします。

パルテノン多摩植物標本整理ボランティア

パルテノン多摩歴史ミュージアム　仙仁　径

パルテノン多摩のボランティア活動

パルテノン多摩歴史ミュージアムでは、地域の文化を記録する様々な活動の一環として、ボランティア活動を展開している。当館で現在活動しているボランティアグループは、植物標本整理ボランティア（1987年～）、古文書解読ボランティア（2004年～）、定点撮影プロジェクト（2007年～）、石仏調査会ボランティア（2007年～）、多摩くらしの調査団（2008年～）の5グループである。各グループの活動の成果は、展示や図録に様々な形で反映されるほか、グループによっては調査報告書も刊行されるなど、活動成果が市民へと還元されている。ボランティア活動は当館の運営に不可欠な存在と言えるだろう。本稿では、筆者が担当している植物標本整理ボランティアについて紹介したい。

植物標本整理ボランティアの歴史

1981年頃、多摩市で博物館構想が持ち上がり、多摩市は博物館設立に向けて「多摩市の自然を知ろう」と題する市民講座を開催した。これがきっかけとなり、翌年市民団体「多摩市植物友の会」が誕生し、博物館に市民で集めた標本を収めるべく、植物観察会と植物標本作成が始まった。その活動がパルテノン多摩開館後、当館の植物観察会と植物標本整理ボランティアとなった。これらの機運を作ったのは多摩地域の植物研究家である畔上能力氏で、氏には1981年の市民講座から現在当館で実施している植物観察会ステップアップコースに至るまでご指導いただいている。植物標本整理ボランティアは、多摩市植物友の会会員の有志によって行われてきたが、近年は活動を知った一般の方もボランティア活動に参加されている。

活動内容

大きく分けると、①標本の収集・作成、②同定作業、③データベース登録・ラベル作成、④台紙への添付、⑤標本棚への配架の5つの作業がある。標本収集については現在ほとんど行っていないが、時々外部から標本の寄贈があるため、収蔵点数は年々増加している。ボランティア活動は月に1回、10人程度で行っているが、役割分担を決め、植物分類に長けたメンバーは同定作業を、パソコンの操作に詳しいメンバーはデータベース登録作業を、それ以外は台紙に標本を貼る作業を行う。台紙に張る作業は一見簡単そうに見えるが、様々なルールに沿って貼る必要があり、かつ細かな作業も多いため、熟練を要する。また標本棚への配架も植物分類学の知識がないと行えない作業である。

標本の活用

上記の工程を経て整理された植物標本は、2014年1月現在8,913点を数え、地域の大切な自然史資料として標本庫で保管しながら、様々な形で活用している。例えば、当館では年3回の企画展と、年1回の特別展を開催しているが、植物が関連する展示などで植物標本を展示している。一方、植物標本は当館学芸員だけでなく、一般の方にも利用が可能である。標本には採集年月日、採集場所、採集者名が書かれたラベルが添えられるため、「いつ、どこで、何が生えていた」のかを後世に伝える証拠となり、植物多様性に関する研究などで活用される。近年、当館を含む各地の標本庫で標本情報のデータベース化が進み、インターネットで収蔵標本を調べられる標本庫も増えてきた。さらに国際機関「地球規模生物多様性情報機構（GBIF）」が世界各地に散らばる標本情報の集積を行っており、当館もGBIFに情報提供を行っている。GBIFデータポータル（http://data.gbif.org/welcome.htm）では、例えば「Quercus serrata（コナラ）」を検索すると、コナラに関する情報が表示され、さらに採集された地点が地図で示される。また元となった標本データを確認することもできる。GBIFに当館の標本情報を提供する事により、世界中の人が当館の収蔵標本の情報を利用できるようになった（2014年1月現在は登録作業中）。

GBIFコナラ地図表示

ところで、多様性に関する研究ではDNAを用いた研究が進んでおり、主に野外で採取されたサンプルが研究に用いられている。近年標本庫に収蔵されている標本からも、一定条件で作られた標本であればDNAを抽出できる事がわかった。そのため、当館でも可能な限りDNAを用いた研究に活用できる標本作りを心掛けている。以上のように、整理した標本が様々に活用されることは、メンバーの活動へのモチベーションにもつながっているようだ。

おわりに

植物標本は、適切に管理すれば数十年、数百年後まで伝えることができる資料だ。20世紀から21世紀にかけて当地域で採集された植物標本は、未来の人にとってもきっとかけがえのない資料となっているはずである。植物標本整理ボランティアの活動は、現在の博物館活動を支えているばかりでなく、未来の子孫の知的活動にも役立てられるだろう。そのためにも、今後とも継続的に活動できるように学芸員として支援していきたい。

狛江市立古民家園（むいから民家園）の紹介とその活動報告

狛江市立古民家園（むいから民家園）・学芸研究部会　稲葉和也

平成25年度より狛江市立古民家園（愛称むいから民家園）を三博協の新規加盟館（博物館相当施設　準会員）として加えて頂きまして、誠にありがとうございました。

この民家園は開園して12年目になりますが、市内には博物館や郷土資料館、文化館などの施設もありませんので、この民家園がそれらに代わって次の世代に継承していくための施設とすべく努力してまいりました。三博協に加盟させていただいたのも、いずれは市に相応の郷土資料館が建設されることを願ってのことであります。

むいから民家園・開園までの経緯

さてこの狛江市立古民家園は名称のごとく市の施設でありますが、むいからの愛称が付けられております。その理由はこの民家園成立の経緯に関係しています。施設の中心となっている旧荒井家住宅主屋と旧高木家住宅長屋門の保存運動は市民によって行われ、その基本計画や実施計画も市民と行政の協業によって推進されました。その結果その管理運営に当たっては、市民による狛江市立古民家園運営市民協議会に委ねられることになりました。その愛称も市民から募集され、狛江の民家の屋根が麦から（地元では“むいから”と訛る）で葺かれていたことから名付けられました。

平成3年9月小田急線複々線高架事業のため線路脇に建っていた旧荒井家の主屋が取り壊されることになりました。

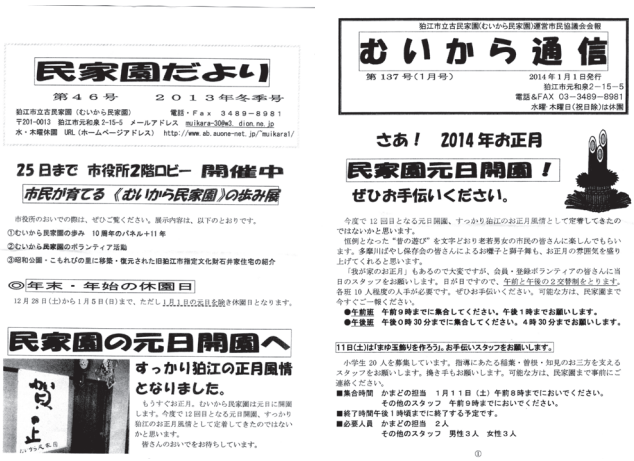
この主屋は昭和2年小田急線開通の際にも、曳き屋して線路脇に移築されていましたが、2度に亘る線禍（近代化）のために消失されることは忍びなく、またこのお宅は古い形式を止め、建築部材はまだ充分使用に耐えられることから、保存しようという運動が市民の中から起こりました。その11月市民の募金によって解体工事が進められ、収納庫に保管されました。また行政はこの建物の価値を認めて解体前に文化財の指定を行いましたので、次のステップ即ち民家園用地の取得、さらに復元工事へとつながりました。

平成5年民家園用地が購入され、8年復元基本検討委員会発足、12年復元ワークショップを市民と行政との協業で開催され、その年末から工事が始まりました。その間11年には元名主家の旧高木家の長屋門も市民運動によって保存され、計画に加えられることになりました。

工事中には近くの小学校の児童も加わり、出来上がる民家園の夢を描いた看板作りから草刈り、上棟式、屋根葺きや土壁塗り、床板張りなどを手伝い、開園の儀式にも参加しました。かつて民家が建てられる時には村中の村民が協力したように市民が建設に参加したことは、大人に限らず子供たちにも大きな思い出を残したと思われます。10数年経った今日、その子供たちが大学生や社会人としてこの民家園の活動を支えてくれるようになりました。

管理・運営・活動について

平成14年4月、開園にあたり市は「狛江市立古民家園条例」及び「施行規則」を設け、市からその管理運営を委託されることになった運営市民協議会は会則を設けて組織を整えました。民家園は会員とボランティアによって運営され、会員の中から役員（会長、副会長、理事、監事）が決められます。会員は会費（年1,000円）を収め、『民家園だより』（季刊）が配布され、登録されたボランティアには『むいから通信』（月刊）が配布されています。また管理運営の実務を行うために事務局が置かれ、常勤の事務局長と非常勤の職員が数名当たっております。


民家園だより
第46号　2013年冬号
狛江市立古民家園（むいから民家園）　電話・Fax 3489-8981
〒201-0013 狛江市元和泉2-15-5 メールアドレス mukara-30@ d.ion.ne.jp
水・木曜休園 URL（ホームページアドレス） http://www.eb.auone-net.jp/~mukara1/
25日まで 市役所2階ロビー 開催中
市民が育てる《むいから民家園》の歩み展
市役所のおいでの際は、ぜひご覧ください。展示内容は、以下のとおりです。
①むいから民家園の歩み　10周年のパネル＋11年
②むいから民家園のボランティア活動
③昭和公園・こもれびの里に移築・復元された旧狛江市指定文化財石井家住宅の紹介
◎年末・年始の休園日
12月28日(土)から1月5日(日)まで、ただし1月1日(元日)も臨時休園日となります。
民家園の元日開園へ
すっかり狛江の正月風情となりました。
もうすぐお正月。むいから民家園は元日に開園します。今度で12回目となる元日開園、すっかり狛江のお正月風情として定着してきたのではないかと思います。
皆さんのおいでをお待ちしています。
狛江市立古民家園(むいから民家園)運営市民協議会会報
むいから通信
第137号(1月号)　2014年1月1日発行
狛江市元和泉2-15-5
電話&FAX 03-3489-8981
水曜・木曜日(祝日除)は休園
さあ！ 2014年お正月
民家園元日開園！
ぜひお手伝いください。
今度で12回目となる元日開園、すっかり狛江のお正月風情として定着してきたのではないかと思います。
慣例となった“餅の選び”を文字どおり老若男女の市民の皆さんに楽しんでもらいます。多摩川ぼやし保存会の皆さんによるお囃子と獅子舞も、お正月の雰囲気を盛り上げてくれると思います。
「我が家のお正月」もあるので大変ですが、会員・登録ボランティアの皆さんに当日のスタッフをお願いします。日が日ですので、午前と午後の2交替制をとります。各班10人程度の人手が必要です。ぜひお手伝いください。可能な方は、民家園まで今すぐご一報ください。
●午前班　午前9時までに集合してください。午後1時までお願いします。
●午後班　午後0時30分までに集合してください。4時30分までお願いします。
11日(土)は「まゆ玉飾りを作ろう」。お手伝いスタッフをお願いします。
小学生20人を募集しています。指導にあたる稲葉・曽根・知見のお三方を支えるスタッフをお願いします。挑き手もお願いします。可能な方は、民家園まで事前にご連絡ください。
■集合時間　かまどの担当　1月11日（土）午前8時までにおいでください。
その他のスタッフ　午前9時までにおいでください。
■終了時間午後1時頃までに終了する予定です。
■必要人員　かまどの担当　2人
その他のスタッフ　男性3人　女性3人

広報記録部会によって発刊されている２種の配布誌

運営の決定機関は理事会（45名以内）で、隔月に開催されますが、補完する組織として幹部会が毎月開かれ、正副会長、企画財政部会、広報記録部会、事業推進部会、維持管理部会、学芸研究部会の部会長で構成されます。

事業としては、「狛江学」講座（11月23日「狛江の植木屋さん」開催）、年中行事、教室・講習会、各種イベントが行われ、年間50回ほどの催しがあります。ほぼ定まった事業としては元日開園、桜まつり、子どもの日、流しそうめん、こまめ市などがありますが、むいから寄席や腹話術ライブも人気です。また小物細工、柿渋染めやそば打ち、うどん打ち講習会、教室も盛んです。またサークル活動として、あい染め・機織りの会、伝統食文化の会、朝ごはんを食べる会、そば打ちの会があります。

流しそうめんは夏の終わりの名物になりました

開園以来毎年2万人を超える入園者があり、市内に限らず周辺の人たちにも利用されていますことは嬉しいことです。行事やイベントのお知らせは、市の広報、情報紙などとともに、民家園発行の通信、チラシ、ポスターなどで行っていますが、インターネットによるホームページが若い世代には活用され、遠路はるばるお見えになる方も増えています。

また、老人ホームやデイケアのグループで来られて、園内で食事をしてから畳の上でごろ寝されながら、ご自分の郷里を思い出しておられる姿を拝見しますと、ほのぼのとした思いがします。さらに遊び場として子どもたちが園内を走り回ったり、ベビーカーを押すお母さんたちがおしゃべりしたり、農家の庭先の雰囲気を残し、民家のある公園としても親しまれています。

また、園内の樹木の剪定や草刈りなどは、月一度維持管理部会を中心にボランティアが集まって行っております。

園内の施設

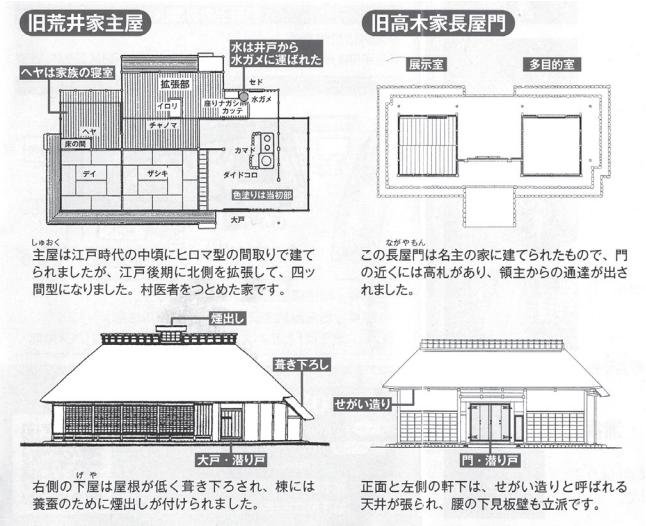
復元基本検討委員会の計画では、主屋を中心として長屋門、納屋、水車小屋、土蔵、外便所など昔の屋敷にあった建物と、管理運営に必要な事務棟と水屋、防火のための貯水槽とポンプ小屋が計画されておりました。納屋は民具の収納や展示・作業場として使い、水屋はイベントには欠かせぬ調理場として必要なものでした。予算も積立てられていたのですが、実施の段階で市の緊縮財政を理由に、園内の敷地は縮小され、納屋や水車小屋、土蔵などもすぐには必要ないとしてカットされ、その上水屋さえも管理棟で間に合わせることになりました。

それでも早く開園を待ち望んでいた市民はその縮小案を承諾しました。開園後12年経った現在、施設としては指定文化財の主屋と長屋門、管理棟とポンプ室、そして市民から寄贈されたスチールの収蔵庫があるだけです。一日に2,000人を越えるイベントでは、お赤飯を炊いたり、餅や団子を作ったりしていますが、水屋があればもっと豊かな食文化を提供することが可能です。

当初北側の小路と駐車場も園内で水屋が建てられる予定でした

開園後予算もままならぬ中、畑の周りには茶垣（東京たまがわロータリークラブ　2004）や池と小川、桜（国際ソロプチミスト東京・狛江　2005）などの寄贈を受け、環境も整備されました。この間ボランティアによって井戸が掘られ、畑や池には水が供給されるようになり、収蔵施設も整えられました。

田舎に帰郷しても茅葺き民家の生活体験が難しい時代、文化財の民家で、冬は炉端で頬を赤くし、夏は縁側で涼しくまどろみ、餅や団子で昔の食を思い、お囃子やお琴に耳をそばだてられることは、後世に継承すべき貴重な文化遺産です。開園以来市内の小学校が授業の一環として、子供たちに昔のくらしをここで体験させていることは、教えている私たちにとって励みとなりますが、同時に後継者の育成としても歓迎するところです。



囲炉裏の火が暖かく来園者をもてなしてくれます。

民家で聴くバロック音楽の調べはまた格別です

旧石井家住宅と市史編纂事業

むいから民家園のすぐそばには、江戸時代に和泉村旗本松下領の名主を勤めていた石井家住宅があります。屋敷には旧鎌倉道に面して長屋門が建ち、主屋と土蔵が遺されていました。立川市にある国営昭和記念公園のこもれびの里ではかねがね武蔵野の古民家を求めておりましたが、適当なお宅がなかなか見つかりませんでした。平成20年石井家からの寄贈のお申し出があり、3棟の建物が移築されることになりました。その秋解体されるまでの半年間は、狛江市の指定文化財として公開され、解体調査の見学会や展示会も行われました。主屋は18世紀中頃、長屋門は19世紀前期、内蔵は明治初期に建てられたものでしたが、土蔵からは多くの民具とともに大量の古文書が発見されました。これらの古文書はすでに刊行されている『狛江市史』にも採録されていない貴重な史料であることから、新しい市史編纂事業がなされることになりました。

平成25年8月、3棟の復元工事は竣工し、武蔵野を代表する民家（立川市指定文化財）として公開されました。

その主屋は、むいから民家園の旧荒井家住宅と同じ葺き下ろし屋根となっています。建築年代も同じ18世紀後半で、当初はヒロマ形式でした。新しい『市史』には、むいから民家園民家と旧石井家住宅も記録されることでしょう。

移築前の石井家長屋門　屋根に麦ワラが使われていた

こもれびの里は、武蔵野の谷戸の暮らしを再現しています

完成した旧石井家住宅　長屋門、主屋、裏手に土蔵（文庫蔵）があります

むいから民家園のあゆみ展

むいから民家園は平成25年で開園12年を迎えました。毎年入場者数も多く、市民から愛される施設となってきましたが、それでもまだ来園されたことがない人がおられることから、少しでも民家園の活動を知っていただこうと、市役所の入口ホールで昨年12月16日から25日まで《 むいから民家園の歩み展 》を開催しました。年末の忙しい時期でしたが、皆さん熱心にご覧になり、質問をされたりアンケートにも答えて頂きました。私たちは民家園で日々行事やイベントに追われていますが、このような広報活動を通して市民参加の輪を広げていくことも大切なことでしょう。

市役所ホールでの展示場風景　旧石井家住宅の紹介もされました

むいから民家園　今後の課題

開園から12年経ちましたが、納屋や土蔵、水屋など当初計画されていた施設はまだ造られておりません。これからのむいから民家園の活動はイベント中心ではなく、市民の自主的なサークル活動の輪が広がって行くことが大切です。そのためにも様々な活動に適応した施設の充実を計り、次世代に引き継いでもらうことが不可欠なことだと思われます。

おわりに

この度むいから民家園を博物館相当施設として三博協に加盟させていただきましたが、私たちはこの民家園を活動する野外博物館として位置づけ、新しくできた昭和記念公園こもれびの里や多摩の各地にある民家園とも連携しながら、新たな民家園活動を目指していきたいと思います。

25年度　東村山ふるさと歴史館の事業報告

東村山ふるさと歴史館　宮澤美和子

24年度の入館者数が前年度より増に転じた。開館以来、徐々に入館者数の減少しているわが館には、非常に喜ばしい事ではある。25年度は再度減少に戻らぬよう職員一同が多くの事業を実施してくれた。秋は毎週末事業という日が続いた。参加者も掛け持ちで受講してくれた。入館者数の結果は未だ出ていないが、せめて昨年並みは維持したいと願っている次第である。微々たる増であっても、体験講座や講演会の受講者が多いということは入館者の大半は当館の展示・事業を目的に来ていると少しは自信をつけたところである。このような課題もある。文化財の維持管理である。東村山ふるさと歴史館の組織は「文化財保護所管」を抱えているが、館内のことはどうにかであっても、館外のこととなると人手も回らず、予算はそれ以上に回らない。市民の目から見れば、「文化財を大切にしよう」ではなく、逆に文化財イコール大切なもののイメージを崩し兼ねない状況である。この状況から脱するためには、もちろんお金は必要だが、長期的な文化財保護の事業を進めていく必要があるとも考えている。その他諸々の課題もあり、解決する問題は山積み状況であるが、それは他の博物館・資料館もそうだろう。そこで提案がある。少ない予算で展示や事業を開催するアイディアや参考例を是非ともこの『ミュージアム多摩』に皆さんが掲載して頂きたいと思う。先にも掲載したことがあるが、東村山ふるさと歴史館では、東大和市立郷土博物館と武蔵村山市歴史民俗資料館と共催事業で「狭山丘陵市民大学」を開催している。この事業としての特徴を予算節約型として見るならば、各市共催ゆえに対応する職員数が多いことや、各市自分の市の宣伝のみでも3市の広報ができるなどであり、外部講師を招いても3分の1の予算で済むなどである。1月初旬から開催が始まった市内の小学校向けの展示「なつかしい暮らしと道具たち」にも職員が自前でつくった模型やレプリカが活躍している。今後も手づくりで模型を増やしていく予定である。他館でものこのようなノウハウがあるのなら、これも是非ともお教え頂きたい。

手作りの木組みと壁・座り流し

手作りのカマド・三宝荒神・板塀

手作りの囲炉裏と餅

最近の活動報告　プラネタリウムリニューアル

東大和市立郷土博物館　野崎洋子

当館には開館当初からプラネタリウムが設置されていますが、老朽化に伴い、平成25年度に投影機をリニューアルすることになりました。これまでの投影機と変わった点について紹介しましょう。

星を映し出す投影機は『メガスターⅡB』になりました。東京ではメガスターを常設しているプラネタリウムはめずらしく、多摩地域では、初めての導入です。

ＬＥＤ電球で映し出す1,000万個の星はとても明るく美しいの一言に尽きます。天の川まですべて、星で表現されているメガスターⅡBは、「世界で最も先進的なプラネタリウム投影機」として、2011年ギネスワールドレコーズに認定されているそうです。

そして、解説の文字や写真はこれまで、スライドを使って紹介してきましたが、今度はドームにさまざまな映像として映して紹介するようになりました。3台のプロジェクターを組み合わせてドーム全体に映す『HAKONIWA3』というシステムです。ビデオ映像やアニメも映し出すことができ、表現の幅が広がりました。

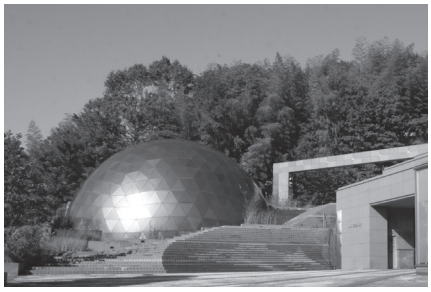
そして、『ステラドームプロ』というソフトは、メガスターと連動して、日の入りの空や星座などを映し出します。このような連動は東京では当館だけです。このほか、過去や未来の天文現象を再現することも自由自在です。宇宙に飛び出して、木星に近づいたり、彗星に乗った気分で宇宙旅行なんてこともできます。

学校の授業では、星の動きを見せるため、空に星の軌跡を描いたりや宇宙から太陽や月の位置関係をみせたりして学習を深めることができます。

これまで親しまれてきた旧投影機はというと、星を映すことはありませんが、この原稿が発行される頃には、郷土博物館エントランスロビーに展示されているはずです。そのほかの投影機類についても、3月15日から開催の企画展示「プラネタリウム今昔」で展示をしました。

リニューアルオープンとなった3月15日には、このときにはメガスターの設計者でもある大平貴之さんの記念講演会など、各種イベントでリニューアルオープンを盛り上げました。

新しい投影システムはこれまでよりも表現の幅も広がり、多彩な演出ができるようになります。プラネタリウム番組をさらに楽しんでいただけるものと思います。私自身も投影するのが楽しみです。ぜひ、一度足を運んでみてください。



新しい投影機はこの中！

ミニ展「チェリャビンスク隕石」の開催

府中市郷土の森博物館　本間隆幸

当館の天文分野では、時宜に適った天文現象を取り上げて、来館者に情報を提供することを心掛けている。

近年、地球の歴史上において小惑星の落下により環境が大きく変化したことが分かってきており、地球に接近する小惑星をNASAや日本スペースガード協会などが監視している。にもかかわらず、2013年2月15日、ロシアのチェリャビンスクに隕石が落下した。これによる怪我人は1000名以上に及び、ニュースで大きく取り上げられた映像は、人々に大きな衝撃を与えた。

この機会に隕石の展示ができたらと思っていたところ、JAXAの吉川氏が日本スペースガード協会の高橋理事長とロシアに調査にでかけ、この隕石の破片を持ち帰ったことを知り、急ぎ連絡をとった。その結果幸いにも、スペースガード協会から6点借用できることとなり、4月28日から9月1日まで約4か月にわたるミニ展「チェリャビンスク隕石」を開催することとなった。来館者の記憶に新しいチェリャビンスク隕石を取り上げたことにより、小さな隕石でも大きなインパクトがある展示となった。

展示期間中に実際に隕石に触れることができるイベントを開催し、多くの参加者を得た。一見石のように見える隕石の重みを体感し、断面を間近で見ることにより、隕石への理解を深めてもらえたことと思う。また、当館でもチェリャビンスク隕石の小さな破片を2点購入し、学習に利用してもらうため市内の小中学校に貸出した。これらの活動を通して、多くの方々の天文・宇宙に対する興味関心を高めることができたと考える。

ミニ展「チェリャビンスク隕石」の展示風景

平成25年度の活動―開館40周年を迎えて

町田市立博物館　矢島律子

町田市立博物館は1973年に開館、今年度開館40周年を迎えました。これを記念して、当館の代表的な収蔵品である東南アジア陶磁と大津絵を主題とした記念展を2回開催しました。

東南アジア陶磁では、今年が日本ベトナム外交関係樹立40周年でもあるので、ベトナム社会主義共和国大使館・公益社団法人ベトナム協会のご後援のもと、近年の日越交流の中で形成された一人のコレクターの一大コレクションを紹介する「開館40周年記念・日本ベトナム外交関係樹立40周年記念―舛田コレクション―ヴェトナム陶磁の二千年」を開催しました。総点数460点、前・後期約3ヶ月という規模でした。ヴェトナム陶磁の全貌を提示して、反響を呼びました。

さらに、大津市歴史博物館収蔵の大津絵およびその関連資料を当館のコレクションと合わせ、大津絵に描かれている画題とは何かを軸に紹介する「開館40周年記念　大津絵大図解」展を開催しました。前・後期総点数120点という規模の大津絵展は珍しく、また、わかりやすい内容ということで、好評を博しました。

開館して40年、町田市の発展とともに当館の収蔵資料は郷土由来の資料に加え、工芸美術作品が充実するなど多様、大量になりました。また市民の要望が変化、多様化しています。こうした状況に当館のハード面、ソフト面両方の構造が追いついていません。

一方、町田市が進める「まちだ未来づくりプラン」では基本目標のひとつとして、「賑わいのあるまちをつくる」を掲げ、「文化芸術活動やスポーツが盛んなまちをつくる」を基本政策としています。町田市の文化芸術振興を推進し、魅力ある都市実現に寄与するため、工芸美術部門を分離して工芸美術館を建設する方向で、町田市は町田市立博物館の再整備事業に着手し、現在、基本計画を策定中です。

企画展「戦国時代の青梅～三田氏の滅亡と北条氏～」について

青梅市郷土博物館　鈴木章久

青梅市郷土博物館では平成26年1月11日から3月23日までの会期で戦国時代の青梅について紹介する企画展「戦国時代の青梅～三田氏の滅亡と北条氏～」を開催しました。三田氏の活動の痕跡が多く見出されるようになる16世紀初めより、北条氏の登場と勢力拡大、三田氏の滅亡、三田氏滅亡後の北条氏照による青梅支配、北条氏の滅亡までをご紹介しています。

戦国時代の青梅では古くからこの地を支配していた三田氏が周辺地域に勢力を広げ、武蔵国の有力な国衆に成長していました。しかし、大永年間初め頃(1521～1528）になると戦国大名・北条氏が本格的に武蔵国へ進出してきたため、三田氏もその傘下に入る事となります。

永禄3年(1560)に関東管領・上杉憲政を奉じた長尾景虎（上杉謙信）が関東へ出兵すると、三田氏は北条氏から離反し上杉氏の陣営に馳せ参じました。長尾景虎は北条氏の本城・小田原城を包囲しますが、攻め落とす事ができず帰国します。その後、対北条氏の最前線に位置していた三田氏はすぐに北条氏の攻撃に晒される事となり、間もなく滅亡しました。

三田氏滅亡後の青梅は北条氏一族の北条氏照が支配し、三田氏旧臣達は氏照の指揮のもと関東各地へ出陣しています。北条氏は関東の大半を支配下に治めましたが、天正18(1590)年に豊臣秀吉の攻撃を受け滅亡しました。

今回の企画展においては早くより資料調査を行い、新資料の探索や、既存の資料集などで紹介されていた関連資料の収蔵確認などをできる限り行いました。

主な展示資料としては今回初展示となる「三田氏宗判物」や三田氏の本拠・勝沼城の古絵図、三田氏軍旗、三田氏滅亡に関する古文書類、北条氏照が三田氏旧臣達に出した「清戸三番衆状」、秀吉との決戦に備え寺社の鐘を借用した「鐘借用状」、その他市内に残されている三田氏・北条氏に関する資料を展示しました。

今回の展示が未だ謎の多い三田氏や青梅の戦国時代研究進展の一助となれば幸いです。

展示風景

三田氏軍旗

平成25年度の資料館事業報告

武蔵村山市立歴史民俗資料館　堀部由美子

平成25年度資料館事業の主なものとしては、特別展「横中馬獅子舞 - 当地伝承260周年記念 - 」とその関連事業が挙げられます。

本展示は、タイトルにもあるとおり、市内中央北側に位置する“横田・中村・馬場”地区に伝承される「横中馬獅子舞」を取り上げ、平成25年の例大祭の様子を、その準備・練習段階から調査した成果を紹介するもので、獅子舞で使用する道具・衣装の他、獅子の使う太鼓胴内の墨書や古文書等の資料から、横中馬獅子舞の歴史についても解説しています。

展示の開催に際して、例大祭の準備・本番・片付け等について、「横中馬獅子舞保存会」の方々の全面的な協力のもと、記録写真の撮影のほか、聞き取り調査を実施しました。また、その調査の中で、獅子舞に使用する各種道具類とともに収蔵されていた明治期から昭和30年代にかけての文書（芳名帳や領収書等）が新たに発見されるなどの成果が上がっています。

さらに、保存会の方々には、太郎獅子とササラすりの展示の際には、着付けをしていただくなど、様々な面から展示をサポートしていただきました。

本展示を企画する上で、伝統芸能を守り伝えてきた保存会の協力は不可欠なものであったといえます。

また、特別展関連事業として、獅子舞の巡行ルートをたどる文化財見学会「横中馬獅子舞を巡る」（残念ながら雨天中止）や、國學院大學兼任講師の城﨑陽子氏を講師として歴史講座「三匹獅子と横中馬獅子舞」を実施しました。

このように、近年当館では、特別展を核として、一つのテーマに沿って、見学会・講座等を関連事業として実施し、資料収集や調査を体系的に進めるようにしています。そのような調査・研究活動を進めていくうえでも、保存会をはじめ、地域で活躍する文化団体等との協働は今後、さらに重要となっていくことを、本展示を通じて、改めて実感させられました。

太郎獅子とささらすり（特別展風景より）

地域博物館とボランティア

あきる野市五日市郷土館　関根輝雄

1　五日市郷土館と市民解説員

市民解説員は、平成8年、市が開催する市民カレッジ人材養成講座「入門講座」を受講し、所定の単位を修得して教育委員会から認定された学習ボランティアで、平成10年に1期生計8名が誕生しました。

現在は53名の市民解説員が、地域における生涯学習の推進を図るため、習得した知識やあきる野の素晴らしさを多くの人々に伝えています。

市民解説員の主な活動の1つとして、市民の方を対象に行う市内探訪があります。これは、市民解説員が市内の各名所、旧跡などを案内しながら、バスや徒歩でめぐるものです。なお、毎年10月から11月の東京文化財ウィークの企画事業として行う市内探訪は、市外の方も対象としていますので、ぜひご参加ください。

市民解説員の解説風景

2　最近の活動報告

平成25年度は、旧市倉家住宅を使った年中行事の展示や体験教室を中心に事業を行っています。

今年度行った主な体験教室は、7月に「綿ぼうしの会」の方たちの協力による「機織り体験教室」を行い、いろいろな色の糸を使ってコースターを織りました。機織りの体験前には、ふわふわの綿が糸に替わっていく様子を見学しました。

初めての試みとして市民劇団の「劇団き楽座」による紙芝居を行いました。この紙芝居ではあきる野市（旧五日市町）出身で、日本で最初のナイチンゲール記章を受章した郷土の偉人萩原タケを紹介しました。また年末には、恒例の「親子餅つき体験」を行いました。

2月の下旬からは、毎年大人気のひな人形の展示を行います。なかなか見ることのできない享保雛や御殿飾りのひな人形を展示します。

機織り体験教室

「劇団き楽座」による紙芝居「萩原タケ絵物語」

親子餅つき体験教室

平成25年度の活動報告

羽村市郷土博物館

当館では「多摩川とともに」をメインテーマに、羽村の自然・歴史・文化を伝えるため、玉川上水、養蚕、中里介山に関する資料を館内に、また屋外には羽村の歴史を今に伝える「旧下田家住宅」などの常設展示を行っています。今年度については、次の企画展を行い、羽村の歴史・文化等を紹介しました。

企画展「新収蔵資料展 ー郷土博物館コレクションー」

平成20年度から23年度の4年間に郷土博物館に寄贈された資料2,345点のうち、100点前後の資料を選び、羽村の職業・寝具・衣類・記録する道具の4つのテーマを設け、展示しました。

展示期間　3月30日～ 6月30日

企画展「玉川上水　～かたちとやくわりのヒミツ～」

都内の小学校4年生が社会科で学習する玉川上水について、羽村の取水堰を中心に、基本的な役割りを模型やパネルを使い、わかりやすく展示しました。

展示期間　7月20日～ 12月19日

ミニ企画展「都新聞時代の介山　ー『大菩薩峠』を執筆しはじめた頃ー」

郷土の小説家、中里介山が小説「大菩薩峠」を新聞に連載を開始して、100年目の節目の年にあたることから、常設展（中里介山の世界）のほかに、展示コーナーを設け、都新聞時代の介山の写真などを展示しました。

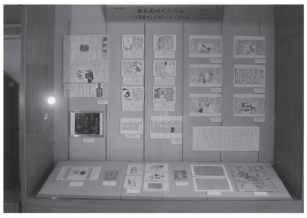
展示期間　9月7日～ 11月17日

天皇皇后両陛下の来館

平成25年5月31日、天皇皇后両陛下が当館をご視察されました。玉川上水に関連する資料や養蚕関連資料など、館内の展示資料を熱心にご覧になられました。

企画展「玉川上水　～かたちとやくわりのヒミツ～」展示の様子

企画展「新収蔵資料展-郷土博物館コレクション-」


ミニ企画展「都新聞時代の介山」

最近の事業報告と市民協働事業

立川市歴史民俗資料館　小川　始

○最近の活動から

平成25年度における立川市歴史民俗資料館のおもな事業は、展示活動として企画展示を5回、ミニ企画展を5回、出張展示を5回、普及活動として体験学習事業（食文化体験や年中行事体験、文化財散策など）を13回、講演会を4回実施しました。調査研究活動としては、当館で所蔵している砂川村役場文書の調査を砂川村役場文書研究会と協働で実施しました。

以上の活動のなかで、新規に実施した事業は出張展示で、平成25年7月20日には、市内の国立国語学研究所で開催された「日本語探検1013」に参加し、民具などの収蔵資料を展示してワークショップを行いました。このような研究機関との連携や出張展示などの活動は今後さらに充実させていかなければならないと考えています。

日本語探検2013

○とんからりん機織りクラブ

次に市民協働事業のとんからりん機織りクラブについて紹介します。とんからりん機織りクラブは、平成23年～24年にかけて当館を使って開催された機織り講座の参加者で結成されたグループで、郷土の伝統文化としての機織りを保存・継承しようという目的で活動しています。会員数は20名、定例として毎週火・水・木の3日間当館で活動している他、自主学習会も企画しています。活動の成果として、夏（8月末）と春（3月末）に機織り祭りを開催し、会員の作品展示やミニ体験講座を行い、会の目的でもある機織りの継承を図っています。毎年、機織り祭りに参加された子供たちが真剣な眼差しで機織り体験をしている姿を見ていると、やって良かったなと感じずにはいられません。

はたおり祭り（2013年8月）

「谷保の歌が聞こえる～歌と共にみる村の暮らし～」展と音声・映像資料の再発掘と活用

くにたち郷土文化館　安斎順子

くにたち郷土文化館では秋季企画展「谷保の歌が聞こえる～歌と共にみる村の暮らし～」展を10月26日～12月9日の会期で開催しました。

国立市の前身である谷保地域では、かつて暮らしの中で「棒打ち歌」「糸ひき歌」「臼ひき歌」などの労作歌、「高砂」「これさま」「小桜」などの祝い歌、「正月ってなんだんべ」「まりつき歌」などのわらべ歌などが歌われていました。

これらの歌は暮らしの変化とともに歌われなくなっていきましたが、昭和57年には東京都の民謡緊急調査が行われ、その後、昭和50代から平成にかけて教育委員会や図書館、くにたちの暮らしを記録する会などにより記録が行われました。

本展では、かつて採集されたこれらの音声データを、デジタル化し、その中から展示室で24曲の歌を音声再生装置によって来館者に聞いていただけるようにしました。

また、昨年ビデオ資料をデジタル化し、その中かから、「くにたちビデオひろば」（昭和59年）の麦打ちと麦打ち歌の様子を映像コーナーにて放映しまた。

このように、近年くにたち郷土文化館では、かつてビデオに撮られた映像や音声が展示において重要な役割を果たすことが多くなっています。音・風景・動かすことでわかる機能など、文字に起こして表現することが難しいものにおいては、一時資料と共に映像・音声資料を活用することでより多くの情報を見る側に与えることができます。

今後これらの活用を進めるにあたって、記録媒体をデジタル化することを積極的に進め、整理していくことが課題といえます。

展示室内の様子

開園20周年記念シンポジウム「これからの野外博物館」を経て

江戸東京たてもの園　高橋英久

平成5年3月28日に開園した江戸東京たてもの園は昨年、開園20周年を迎えました。

平成25年4月20日には30棟目の復元建造物である「デ・ラランデ邸」も公開しました。たてもの園はこれ以降、いわば第二ステージを迎えることとなります。

昨年、平成25年3月23日(土)には、江戸東京たてもの園開園20周年イベントの一つとして、当園ビジターセンターにて記念シンポジウム「これからの野外博物館」を開催しました。パネリストとして、国外よりスウェーデン・スカンセン野外博物館館長ジョン・ブラットミュール氏と、オランダ・アーネム野外博物館館長ピーター・マーテス・ガイスバース氏、国内より法政大学デザイン工学部教授の陣内秀信氏をお迎えしました。このシンポジウムはこれからのたてもの園のビジョンを模索するうえで大変示唆に富むものとなりました。特にヨーロッパを代表する野外博物館の館長から直接、博物館に対する考え方について話しを聞くことができたことは大きな刺激となりました。両館の館長のプロフィールは以下の通りです。

■スウェーデン　スカンセン野外博物館（1891年設立）
館長ジョン・ブラットミュール氏
経歴：スウェーデンにおいて複数の企業の社長／CEOを経てスカンセン館長に就任。財務とマーケティングに明るく、文化に対する造詣も深い。
講演タイトル：「世界初そして今も発展し続ける野外博物館　スウェーデン・スカンセン野外博物館」

■オランダ　アーネム野外博物館（1912年設立）
館長ピーター・マーテス・ガイスバース氏
経歴：オランダの大学を卒業後イタリアの大学でも学ぶ。専門は美術史と考古学。オランダやアメリカの大学にて教鞭をとった後、アーネム野外博物館館長に就任。
講演タイトル：「オランダで暮らす人々について。その親しみやすさと深み。」

そしてこのシンポジウムの開催が縁となり、今年8月には、両館への見学と2年に一度行われている「ヨーロッパ野外博物館会議」にたてもの園より園長と学芸職員が参加しました。さらにこの参加を縁として、今年度3月に再度計画されている国外の野外博物館を含めたシンポジウムにカナダ、オーストラリアからのゲストを招くこととなりました。幸いなことに、良好な関係を連続して築くことができました。この一連の関係性により、グローバルな視点から野外博物館の存在意義を問い直し、これからの野外博物館の姿を模索するきっかけを得ることができました。歴史・実績のある国外の野外博物館を範としながらも、日本独自の風土と文化に培われた日本ならではの野外博物館の姿を追求していきたいと考えています。

活発な議論が行われたシンポジウムの様子

今年度の活動

国立天文台天文機器資料館　大島紀夫

国立天文台は「国立天文台天文機器資料館」として三博協に加盟していますが、天文に特化したミュージアムの「国立天文台天文ミュージアム」として発足したいと検討を進めています。その活動としては、常時公開として、構内施設を部分的に毎日いつでも見学できるようにし、4次元ディジタル宇宙シアターの公開、観望会、説明員を付けてのガイドツアーなどを実施しています来台者は24年度37,000人を超え、今年度も団体見学者の数が増え、説明員付きの希望が多く、職員の配置に気を配るようになってきました。そこで、予てより検討を進めていた、職員以外のボランティアによるガイドを養成しようという構想を今年度、実施しています。10名の受講生が8回の講座を受講し、勉強しています。多くの博物館のお話を聞くと、ボランティアの説明員、解説員が活躍している話を伺い、それぞれの運営にはボランティアの方の協力が不可欠と見受けられます。天文台でもミュージアムを目指していることでもあり、さらに、その必要性を感じ、ボランティアの協力をお願いすることにしました。決して直ぐに戦力となることを期待しているわけではなく、一つずつやっていただけたらと考えています。各館の話をお聞きすると、相当数のボランティアの方が登録されており、天文台もこれからもガイドボランティアの養成を続けていくことが必要かな、と思っているところです。また、展示品を地震から守るために、免震台の導入を計画し、年度内に実施します。特に、レンズなどのガラス類は修理できないこともあり、これらを優先して導入する予定です。

「学芸員養成課程展示室」開室2年目の成果

首都大学東京 91年館（学芸員養成課程展示室・実習室）　小林加奈・村田昌則

首都大学東京91年館（学芸員養成課程展示室・実習室）は平成24年度から展示施設としての利用を開始し、本年度で2年目を迎えました。

当館は首都大学東京における学芸員養成教育のために使用する一方で学外の皆様にも公開しており、大学の授業期間中には常設展示をご覧いただけます。また本年度は2回の企画展も実施しました。

企画展「多摩のいま・むかし―八王子の山城・中野村の象―」（7月12日～7月25日）

首都大学東京南大沢キャンパスが所在する多摩地域の歴史に注目し、研究・教育の成果を展示しました。展示は3コーナーで構成され、時代によって大きく範囲を変化させてきた「多摩地域」の変遷、中世の山城・八王子城と豊臣秀吉による関東侵攻についての解説、そして本学所蔵の古文書「堀江家文書」の解読を行いました。また期間中には大学説明会が開催され、高校生に向けて、学生による展示内容や大学生活の解説を実施しました。

企画展「東京の大地を探る―関東平野300万年の歴史―」（10月26日～11月10日）

身近な自然である東京の地形・地質とそれに関連する最新の研究成果を多様な地図・写真・地質試料をもとに紹介しました。市街化が進む東京でも大地のなりたちを身近に観察できる「東京のジオスポット」の紹介では、メモを取りながらじっくりとご覧になる方も多くいらっしゃいました。

各企画展では、期間中に講演会やシンポジウムを開催し、沢山の参加を得られました。また来館者の方とのお話や、アンケートの回答中には内容について満足のお声、一方で改善のご要望もいただいています。展示室として2年目を迎えて地域の皆さんのご意見をいただく機会も増え、少しずつ活動が定着してまいりました。今後も大学の展示室ならではの特色を生かした取り組みを継続していきたいと考えています。

企画展・シンポジウム会場の様子

平成25年度活動報告

小金井市文化財センター　倉澤淳子

小金井市文化財センターは、市内から発見された考古資料・古文書・民具等の文化財を保存・展示し、身近な郷土の歴史に親しんでいただくための施設です。この建物は『浴恩館』と呼ばれ、昭和6年から青年団講習所として使われた由緒ある建物です。講習所長であった下村湖人の小説『次郎物語』の舞台としても知られ、市史跡に指定されています。

平成25年度は、東京文化財ウィーク関連事業として、秋の企画展と、文化財講演会を行いました。また、調布市さんと共催で予定していた文化財ウォークは荒天のため残念ながら中止となりました。

●春の企画展「名勝小金井（サクラ）展」

江戸時代から花見の名所として世に知られた玉川上水堤の名勝小金井（サクラ）のあゆみを、錦絵・絵葉書・写真・文献等、多くの資料で紹介しました。

・期間　平成25年4月3日～5月6日
・来館者数　499人

●秋の企画展「地図にみる小金井」

明治の村絵図から昭和の住宅地図まで、様々な小金井の古地図を展示・紹介しました。

・期間　平成25年11月3日～12月26日
・来館者数　650人

●文化財講演会「桜樹接種記念碑と国木田独歩文学碑について」

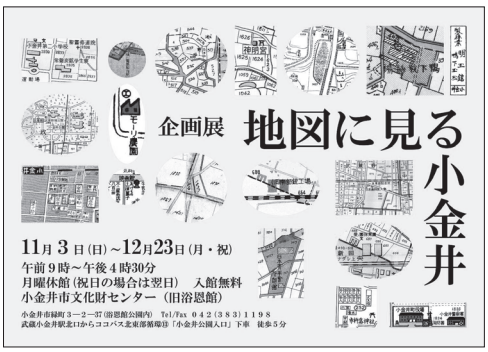
小金井の桜堤を愛した下田半兵衛と国木田独歩の碑を観賞し、江戸から明治の小金井の歴史を解説していただきました。

・開催日　平成25年11月16日（土）
・講　師　廣瀬裕之さん（武蔵野大学教授・書家）
・参加者数　14人

●はたおり教室

小金井市文化財センターでは、所蔵している機織機を活用し、市内の小中学生を対象に、伝統的な裂き織による技法のはたおり教室を行っており、毎年好評です。

・開催回数　6回（7月、8月に開催）
・参加者数　41人



国指定重要文化財「小林家住宅保存修理事業」中間報告

檜原村郷土資料館　清水正治

小林家は、江戸時代に藤原地区の組頭を勤めていた家柄であり、東京の山地の民家として、村一番の古い家といわれ、標高600m余りの南斜面に立つ一軒家で東京都から山梨県へかけての民家の関連をしることができる貴重な建物です。

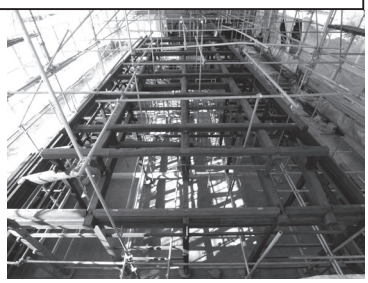
建物は、昭和53年1月に国の重要文化財に指定されました。建築年代は、建物の構造と当家に組頭としての古文書が残されていることから見て、江戸時代中期の元禄16年頃に建てられたものと推定されます。

本屋は、建坪約53坪で西側面を除く三方の縁を後設、南正面はせがい造り、屋根は、茅葺で入母屋造りの形式を持っています。内部は、土間・ざしき・なんど・とばでい・奥でい・床の間が設けられています。そのほか付属屋として厩・便所・倉・納屋があります。

柱礎石据付高さ、通りの調整作業

とばでいの梁行・桁行梁仮組み作業

平成23年度から平成26年度の4ヵ年で保存修理事業が実施されております。前回は、解体終了までを掲載しましたが、平成25年度は基礎工事から建物の棟上げ工事を紹介致します。基礎は玉石を使いその上に柱を載せる作業は、玉石の凹凸に合わせ柱材を削るため繊細な技術が要求されるため、時間と労力が掛かりました。



小屋梁までの軸部組立て作業

次に軸組から棟上げ工事ですが、材料については今まで使用していた古材を活用し、腐って使えない部材のみ新規に作製し使用しています。今後の工程は、屋根工事として、茅葺き作業を行い、その後、外壁・内壁・造作・外講工事等が行われる予定です。

昔は、村内にも多くの茅葺き屋根の家がありましたので、屋根の葺き替えには大量の茅が必要となるため、雑木林を伐採して焼き払い、そこから生えた茅を屋根材として使用していました。そのため、当時は村内に何ヵ所も茅狩り場を確保していました。（村の人々はその場所を「かやと」と呼んでいました。）

棟上げ作業

事業は、平成26年度まで行いますので、次回も機関誌の中で情報提供していきたいと考えています。また、完成いたしましたら興味のある方はご覧頂きたいと存じます。

奥多摩 水と緑のふれあい館　活動報告

奥多摩水と緑のふれあい館　堀口行雄

「奥多摩水と緑のふれあい館」は、旧「奥多摩郷土資料館」をリニューアルし、本年秋に開館15周年を迎えました。
15周年にあたり、記念行事として様々なイベントを企画し、また写真コンテスト等も実施しました。おかげさまでここ数年の中ではより多くのお客様をお迎えすることができました。

東日本大震災後しばらくは自粛ムードが漂い、観光どころではないということも影響し、来館者も減少傾向にありましたが、今年は震災前の水準に戻りつつあります。今後も多くのお客様にご来館いただけますよう気持ちを新たにするよう心がけています。
一昨年リニューアルしました展示コーナーは来館されたお客様（特にお子様向けに）に相変わらずご好評をいただいております。
また、周囲を豊かな自然に囲まれ、四季折々の彩色の変化が目の当たりに楽しめる場所に立地しているという当館の条件をいかし、館のPR活動に力を注ぐことや、水道局やJR東日本等、団体との共催事業の実施により入館者の確保に力を注いで参りたいと考えております。今後も自然の博物館も併せ持った施設として奥多摩湖を訪れる多くの方々に楽しんでいただけるよう管理運営を心がけていきたいと思っています。

25年度の当館の主な活動としては、次のイベント等を実施しました。

○4月20 ～ 21日・春のミニコンサート（2日間延べ4回公演）
　内容：ソプラノ歌手の公演
○6月1 ～ 7日・水道週間（7日間）東京水等配布
（都水道局と共同）
○8月16日・夏のフラダンスショー
○8月1 ～ 31日・奥多摩湖と周辺写真展
　展示内容：奥多摩湖周辺の四季等
○9月8日・水源地郷土芸能フェスティバル
　内容：小河内の郷土芸能（獅子舞2団体及び鹿島踊りの上演）
○10月1日・都民の日イベント（ビデオ上映等）

○10月12日・ヘブンアーティスト公演（午前午後の2回公演）
　内容：パントマイム・マジック等
○11月各週・15周年記念イベント
　3日・奥多摩町立中学校吹奏楽部演奏
　9日・奥多摩清流太鼓の演奏
　　・本年15万人入場者記念イベント
　16日・写真コンクール入賞者表彰式
　16 ～ 17日・秋のミニコンサート（2日間延べ4回公演）
　　内容：ソプラノ・メゾソプラノ歌手の共演、都民交響楽団の演奏
○11月23日・水道歴史館学芸員による講演
○川野車人形上演（26年3月中旬予定）
○水道作品コンクール受賞作品の展示、作文及びポスター
※26年度についても春・秋のミニコンサートを主に郷土芸能の公演等を予定しています。

中学校吹奏楽部公演

秋のミニコンサート公演

『多摩のあゆみ』第152号特集「多摩の炭焼き」

（公財）たましん地域文化財団歴史資料室　坂田宏之

当財団の季刊郷土誌『多摩のあゆみ』第152号では、「多摩の炭焼き」を特集しました。

多摩ニュータウン開発による大規模発掘調査では、原始・古代の成果だけでなく500箇所以上の炭焼窯が発掘されています。この「多摩の炭焼き」特集はその成果を踏まえ、炭の生産やそれにかかわる儀礼、利用の実際などを加えて構成しました。

山口慶一氏の論考「多摩の製炭業の歴史―南多摩における製炭のあゆみ、産業としての変遷―」では、多摩地域における古代以降現代に至るまでの木炭生産の画期・社会動向・情勢と「炭」が都市生活や産業に与えた影響や功績について概説をいただきました。

長佐古真也氏の論考「多摩ニュータウン遺跡からみた江戸近郊の炭焼き」は、多摩ニュータウン地域の発掘で検出された炭焼窯の形態・分布から、多摩丘陵での炭焼きのあり方や移り変わりを分析しています。近世後期の多摩丘陵の炭焼きは、農間余業ではすまない江戸の出荷を前提としたものであり、商業資本主導で行われていた可能性もあることが示唆されています。

福田敏一氏「近世小野路村小島家における炭焼き」は町田市小野路の小島家に残る「小島日記」の、天保期の記録からみた炭焼きと経営の実際です。そこには自家の利益というより、小作人など地域の利益になるかたちで炭焼きを行う、大農家の姿も見えてきます。

村田文夫氏の論考「多摩丘陵産のブランド・黒川炭を焼く―最後の伝承者・市川家の見聞録―」では、昭和53年の市川祐家での炭焼き作業の取材をもとにした、黒炭生産、儀礼の実態の貴重な記録がまとめられています。

齋藤慎一氏の論考「多摩の炭―近世の市と中世の火鉢―」では、『武蔵名勝図会』や『御嶽山一石山紀行』などの近世の地誌書に見られる西多摩の山沿いにおける「炭」の商いの記録を踏まえ、後北条氏の文書や青梅市御岳山、青梅市藤橋城などで出土した火鉢などから、近世の炭生産が中世に遡る可能性があることを論じています。

工藤宏氏・三浦久美子氏論考「狭山茶づくりと炭の活用」では、狭山製茶における炭の重要性をご紹介いただきました。焙炉での手揉み製茶で、狭山茶の色・味・香り、とくに香りを決定づける上で、匂いや煙を発生しない炭という熱源は、大変重要なものでした。「お茶師」たちが高価な燃料である炭で、いかに効率的に製茶したかなども紹介されています。

炭の生産・流通からは、「生産地・流通業者・都市」の関わりあいがよくわかります。本特集の長佐古真也氏論考にありますが、多摩丘陵では、江戸時代前期に見られた耕作地が、江戸時代中後期以降は製炭原料である落葉広葉樹林の里山景観に一変してしまうほど、都市江戸の燃料需要を支える「産業」であったようです。

企画展「谷戸のおはなし」の開催

パルテノン多摩歴史ミュージアム　仙仁　径

パルテノン多摩歴史ミュージアムが立地する多摩丘陵は、八王子市南部から横浜市南部にかけて広がる丘陵で、名前のとおりたくさんの丘と「谷戸」が続いています。谷戸とは多摩丘陵などで見られる浅く細長い谷の事ですが、起伏のある地形は平坦な武蔵野台地とはまったく異なる景観を生み出し、そして人々の暮らしにも大きな影響を与えてきました。丘陵、特に谷戸地形は多摩市を特徴づける重要な要素と言っていいでしょう。そこで、当館では、平成25年11月14日から平成26年3月10日にかけて谷戸地形を紹介する企画展「谷戸のおはなし～多摩の大地に刻まれたシワ～」を開催しました。

今回、展示内容の正確性を期すため、専門家にご教授いただきましたが、知らない事も多く、驚きの連続でした。例えば、多摩丘陵には一時期古相模川が流れ、古多摩川方面へと向かっていたと考えられ、「御殿峠レキ層」が旧流路に堆積していますが、その後古相模川の流路は相模湾方面へと変わります。これは多摩丘陵付近が地殻活動の影響で隆起したからだと考えられていますが、いつ頃、どのような理由でそのような地殻活動が生じたのかは明らかになっていないとの事でした。また、樹枝状に谷が広がり、浅くて谷底が平坦で湿地になる谷戸は、複雑な地殻変動の影響を受けないと形成されないもので、世界的にもほとんど見当たらず、国内でも丘陵地の一部でしか見られないとの事でした。さらに地形だけでなく、谷戸でのかつての営みについて地域の方々から聞き取り調査をしたところ、農業を営んでいた方々がどのようにして谷戸地形と向き合っていたのか、大変興味深いお話しを伺うことができました。

一方、展示の準備をしていて今後調べてみたい事も出てきました。その一つが谷戸の横の斜面で時々見られる小規模の棚田です。これまで谷戸と言えば、丘にはさまれた細長い水田（谷戸田）が奥まで続くイメージでしたが、多摩ニュータウン開発前の航空写真や風景写真を見ていると、所々谷戸田横の丘の窪んだ場所に扇状に広がる棚田があることに気付きました。地形学を学んでいない素人目には、谷戸の丘の「新規崩壊地」の窪みに棚田を作ったように見えます。従来のイメージにそぐわないこの棚田については、改めて地学の専門家に意見を求めたいと思います。

ネーミングライツの導入

コニカミノルタサイエンスドーム（八王子市こども科学館）　森　融

八王子市こども科学館（正式名称）は平成25年8月1日からネーミングライツを導入し、新しい愛称が「コニカミノルタサイエンスドーム」となっています。

ネーミングライツはスポンサーとなる企業に、契約により一定期間、施設命名権を付与するものです。
企業は、施設に企業名を冠することによって広告価値により経済効果を見出すもの。市側は命名権料を活用することで自主財源を確保しようとするものです。

八王子市では平成23年4月に開館した新しい市民会館がネーミングライツによって「オリンパスホール八王子」となっており、2例目となりました。

ネーミングライツのことが検討に上がってきたのは25年度予算策定時でした。

以下に簡単なスケジュールを記します。

25年度当初予算案に命名権収入を計上
平成25年3月15日　市広報に募集記事掲載
3月19～26日　募集の書類配布
5月14～17日　応募書類の受付
6月　市内部の選定委員会で審査後、決定
　　教育委員会、文教経済委員会へ報告
7月8日　協定締結式
　　看板等のつけかえ
8月1日　スタート
　　市広報にお知らせと締結式の写真掲載

募集にあたって設定した条件は、愛称の使用期間は3～5年程度。命名権料が年間250万円以上でした。

応募および選定の結果、コニカミノルタ株式会社さんに、3年間、年間250万円でお願いすることになりました。

コニカミノルタさんは市内に事業所があり、八王子を含めて多摩地域に多くの従業員の方がお住まいということでご応募をいただきました。

また、当館のプラネタリウム機器がコニカミノルタ(株)のグループ会社であるコニカミノルタプラネタリウム(株)製であるということもありました。

八王子市こども科学館は平成元年1月に開館し、平成13年8月からは「サイエンスドーム八王子」という愛称を使用していましたが、新しい愛称は「コニカミノルタサイエンスドーム」と決定しました。

契約により館正面のメインの看板はコニカミノルタさんが取り替え、道路標識等の表示は当館でおこなうことになりました。

スタートは8月1日と夏休みの真最中でお客様も一年で一番多い時期ですが、スタート後も特に混乱もなく定着し、8月の入館者数は、過去最高の17,740人を記録した昨年同月を上回る18,835人でした。

今後は、これを機にイメージアップに努め集客力を向上させていきたいと考えています。

収蔵品展「ところ変わればだるまも変わる ―ヒゲからヒメまで勢ぞろい―」

調布市郷土博物館　森　悦子

調布市郷土博物館が収蔵する「加藤文成郷土玩具コレクション」は、平成2年当時調布市内にお住まいだった郷土玩具コレクターの加藤文成氏から、生涯をかけて収集されたコレクションを寄贈していただいたものです。昭和時代を中心に、日本各地と一部の中国・韓国の資料が収集されており、現在では姿を変えてしまったものや廃絶してしまった貴重なものも多数存在します。

収集されている資料は、人形（姉様人形、雛人形、首人形、土人形、張子人形、練物人形）、車（米搗き車、雉車、乗り物）、和凧、馬（首馬、木馬、藁馬）、木船、面（紙面、土面、張子面）、羽子板、獅子頭、手毬、だるま、こけし・えじこ、土鈴、土笛、藁細工、メンコ、縁起物、蘇民将来、小絵馬、鷽・天神関係玩具、木地玩具、動く玩具などがあり、郷土玩具に加え、年中行事や寺社、祭礼に関わる用具も含まれています。

また、多くの資料には収集地や製作者・販売者の情報が記録されており、加藤氏が手作りした本の中でさらにまとめられているものもあります。収集資料が充実していることに加え、それに付随する情報があることから、研究資料としても価値のあるコレクションです。

平成25年7月27日から9月16日までの間、加藤文成コレクションの中のだるまを中心に、「ところ変わればだるまも変わる―ヒゲからヒメまで勢ぞろい―」と題した収蔵品展を開催しました。だるまと関連資料230余点の展示に加え、張子の技法で作っただるまの土台に絵付けをするワークショップを行いました。また、スポーツ祭東京2013開催記念として調布市文化会館たづくりで開催された「だるま展～だるまランドにおいでよ～」とも連動し、全日本だるま研究会会長による講演会の共催と、だるまで地域おこしをしている地域グループ「だるチャンプロデュース」を講師に大会キャラクター「ゆりーと」のだるまを作るワークショップも開催しました。

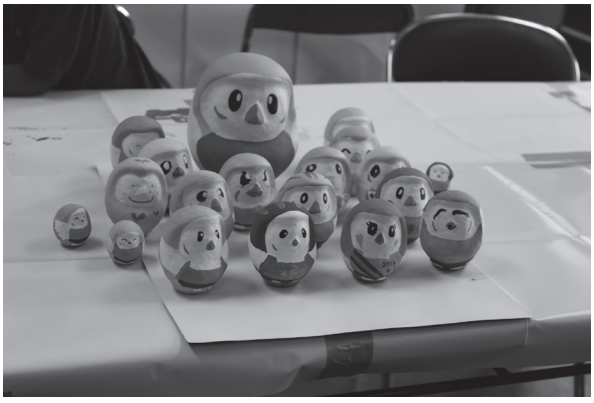
深大寺のだるま市は、日本三大だるま市の一つとしても知られ、調布にはだるまが飾られている家や店も多く、市民はだるまになじみがあると思います。しかし、一口に「だるま」と言ってもその姿は様々で、展示タイトルでも挙げているように、ヒゲが植えられているものや、おかめや姫の顔をしたものもあり、多くの場合、張子製で丸みを帯びたものは「だるま」と呼ばれています。今回は、東北から沖縄までのだるまを地方別に並べ、各地の特色が目で見てわかるように展示しました。来館者アンケートでも様々なだるまがあることへの驚きや、出身地のだるまを懐かしむ声をいただきました。

この展示で特に取り上げたものは、多摩地域で作られただるまです。加藤文成郷土玩具コレクションの中には、西多摩郡瑞穂町石畑・殿ケ谷・箱根ヶ崎、武蔵村山市岸・三ツ木、立川市砂川町、あきる野市小川、八王子市高月町・加住町・北野町で作られたと記録されている資料があります。この中には一般的な男の顔をした赤いだるまの他、おかめだるまや、毛を植えたひげだるま、だるまを抱いた猫や童子の張子もあります。これらの資料については、加藤氏の手作り本『多摩の張子』および『諸国達磨図譜』に詳しく記載されています。また、コレクション外の収蔵資料の中からは、張子のだるまの工程や、市民から寄贈を受けた多摩だるまの必勝だるま、深大寺で開眼された梵字の目のだるまを展示しました。

現在、調布市内にはだるま製作者はいませんが、多摩地域の文化の一つとして、今後他館とも交流しながら研究・活用をして行きたいと思います。

多摩だるまの展示

講演会「だるまは関東で生まれた～だるまの起源～」



ワークショップ「ゆりーとだるまを作ろう」

平成25年度の活動報告

瑞穂町郷土資料館　丸山志保

企画展「新収蔵資料展」

町内では有志による資料収集活動が昭和40年代より行われていました。そこで収集された資料をもとに開館した当館においても、資料収集活動を継続して行っています。こうして収集された資料が多数あるにもかかわらず、近年は活用される機会があまりありませんでした。そこで、平成25年8月27日から10月18日まで企画展「新収蔵資料展」と題して、近年新たに受け入れた資料を公開することになりました。期間中に一部展示替えを行い、平成22年度から25年度に受け入れた自然・歴史・民俗資料の一部、計120点を展示しました。本展の目玉は、ニホンアナグマです。これは平成24年に町内で交通事故死したオスのニホンアナグマを剥製にしたものです。これまで町内で目撃情報はあったものの、当館では剥製を所蔵していなかったため、町内にニホンアナグマが生息していることを示す貴重な資料となりました。

今後も新収蔵資料展を継続して行い、新たに収蔵した資料の公開や調査研究に努めていきたいと思います。

企画展「みずほはたおり探検隊　作品展」

村山大島紬伝承会の指導のもと、郷土の伝統的な絹織物「村山大島紬」の技術伝承・普及を目的として、機織り・染色（藍染め）の1日体験教室と、長期的に機織り・染色（草木染め）を学ぶことができる体験教室を実施しました。その成果として、今年度の体験教室の参加者と、みずほ染織伝承会の会員が制作したストールやバッグ、コースター等を展示する作品展を平成25年10月26日から11月15日まで当館展示室で開催しました。色鮮やかな作品に興味をもつ来館者も多く、当館の教育普及事業やみずほ染織伝承会の活動をPRするよい機会となりました。

企画展「みずほはたおり探検隊　作品展」

企画展「水・緑と観光を繋ぐ回廊計画ー歴史と文化の回廊展ー」

瑞穂町では、平成23年度より「みらいに　ずっと　ほこれるまち“潤いあふれ、活力みなぎる地域社会をめざして”」を将来都市像とした第4次瑞穂町長期総合計画を実施中で、その中に「水・緑と観光を繋ぐ回廊計画」があります。この計画は、町域に分布する遺跡や社寺といった歴史的資源と狭山丘陵や狭山池、残堀川等の自然環境資源・景観資源を繋ぐルートを整備し、地域資源として連携させることで、来訪者の回遊性を高めて、観光の振興を図ることを目的としています。

これをもとに当館では、平成25年10月26日から平成26年1月31日まで企画展「水・緑と観光を繋ぐ回廊計画−歴史と文化の回廊展−」を開催しました。現在計画されている6つの回廊のうち、本展では回廊1「歴史とモニュメントの回廊」を取り上げました。町の社会教育施設である耕心館をスタートして、富士山の茶畑、八高線の樽の口、狭山池等を巡り、日光街道を通って耕心館に戻るルートで、その中のめぼしいものを写真パネルにして紹介しました。解説を見ながら実際のルート散策できるよう、本展の内容をまとめたパンフレットも作成しました。また、回廊1は狭山茶生産が盛んな元狭山地区が中心であることから、製茶道具も併せて展示しました。

このほか、平成25年10月5日に天皇皇后両陛下が初めて瑞穂町を訪問された際、耕心館でご覧になった、当館所蔵の養蚕農家の模型等も特別展示されました。

企画展「水・緑と観光を繋ぐ回廊計画ー歴史と文化の回廊展ー」

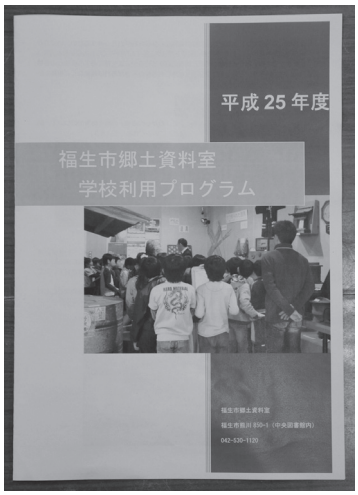
博物館から学校への働きかけ－学校との連携事業の取り組み－

福生市郷土資料室　青海伸一

学校との連携事業は、他館でも実施していることとは思いますが、福生市郷土資料室でも以前より小学校での「むかしの道具調べ」の単元において、博物館資料の見学の受け入れ対応を行ってきました。

他館では小学校の授業時期に「むかしの道具展」を行うところもあるでしょう。しかし、資料室ではいわゆる三種の神器がそろっていないことや、企画展示室を別に持っていないことなどの理由から、常設展示として一部の民具を展示している程度で、授業に合わせた展示などは行っていませんでした。そのようなこともあり、実際の見学利用は市内7小学校のうち、近隣3校にとどまっていました。資料室としてはどちらかというと学校から声がかかるのを待っていたような状況が続いていました。

かと言って、いつまでも待っているだけではいけないと、平成24年度から学校側へ積極的に働きかけるよう方針転換をし、学校の先生向けに「福生市郷土資料室学校利用プログラム」を新しく作成して、全小学校の担任の先生へ配布することにしました。作成にあたっては、過去に資料室の見学に来たことのある先生へ話を聞きに行くなどし、内容を精査しました。



作成したプログラムの表紙

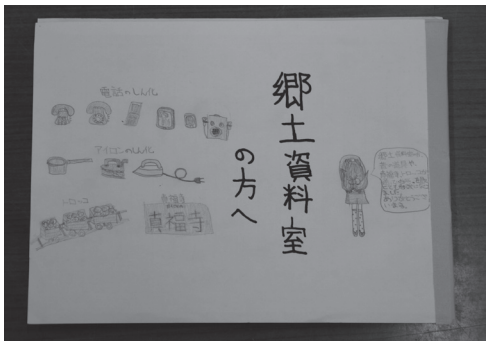
その結果、従来からの見学先としての資料室利用に加え、学校への出張授業や学区内にある文化財めぐり、スライドによるむかしの様子紹介などのメニューも設けることにしました。また、プログラムの配布時期を、むかしの道具調べの単元について授業計画の検討を始める1月初旬としました。

その結果、従来は遠くて資料室まで来ることができなかった1校へ、初めての出張授業に行くことになりました。事前に先生との打合せを行い、この学校では、むかしの道具調べだけでなく、スライドによる学区内のむかしの様子の紹介、学校周辺の文化財めぐりを合わせ、2校時分をあて、特別授業として行うことになりました。

出張授業の様子

途中、インフルエンザによる学級閉鎖もありましたが、担当の先生方からの「ぜひ実施したい」という声から、何度か延期ののち実施することになりました。当日はあいにくの雨でしたが、当初の予定通り教室での授業1校時と周辺の文化財めぐり1校時を実施しました。

後日届いた児童からの感想文を読むと、火のしや炭火アイロンに興味を持った子や、学校の周りがむかしは田んぼばかりであったことに驚いた子、普段通学に使っている道がトロッコの廃線跡だったと聞き、帰宅後におじいちゃんと話をした子など、実物や写真、現地でしかわからないことをそれぞれに感じてもらえたようでした。



児童から届いた感想文集

この学校では担当された先生が、今年度はぜひ資料室で多くの資料に触れてもらいたいと、社会科見学のコースにも組み込んでくれ、学校との連携がいっそう深まったと考えています。

学校との連携事業を進め、先生と実際に話を進める中から、いくつもの課題が見えてきました。例えば、むかしの道具といった時、資料室で展示している道具は、主に電化される以前の時代のものが中心となっています。しかし学校で想定している時代は、祖父母や父母が子どもの頃だそうです。10才の子供の親世代となると2～30年前ということになり、世の中にはファミコンさえも登場してくる時代になってしまいます。そこにすでに学校での想定と資料室の展示内容との間にギャップが生じています。

また、身近な話題として学校近くの多摩川沿いの公園が台風で冠水した話をしました。写真を通して5年前の台風の話を身近な例として話したのですが、10才の子どもにとっては、5年前は記憶にないくらいむかしの出来事になってしまうなど、実際のやり取りを通して私たちが学ぶことも多々ありました。

今回取り上げた学校との連携事業は、他館ではすでに当たり前のように実施していることかもしれません。しかし、福生市郷土資料室ではようやく学校への働きかけを始めたところです。課題の解決を含め、内容をより充実させるとともに、まだ連携のできていない3校へも働きかけを行い、子どもたちへ実物資料が持つ魅力など博物館ならではの体験ができる機会を作り、子どもたちの学びのきっかけを作れるよう、さらに努力していきます。

常設展示のリニューアル～その在り方と課題

清瀬市郷土博物館　土居由布子

清瀬市郷土博物館内の常設展示には、おもに以下の4種類があります。

・歴史展示室
　出土資料や古文書などを展示し、原始～近代までの清瀬の歴史を通史的に紹介。
・民俗展示室
　清瀬の人々の生活について、テーマを設けて解説。
・展示ホール
　展示ケース２台を使用したミニ展示。
・民具ギャラリー
　別棟へ繋がる回廊に農具を展示。

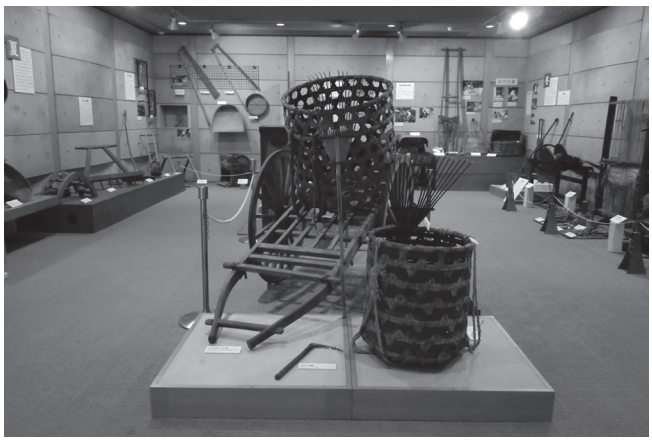
いずれも大規模な展示替えを長らく行えずにいましたが、民俗展示室のリニューアルオープンを契機として、常設展示の在り方の見直しを行いました。

地域博物館の常設展示は、その地域の基本情報を提供する内容が望ましいと考えます。一方、地域性を象徴する展示テーマ・資料はある程度限定されてしまいがちになり、常設展示を目的としたリピーターの確保が難しいという問題が想定されます。そこで、「地域の歴史文化を学習する導入としての常設展示」「何度も足を運びたくなる常設展示」という一見すると矛盾を孕んだ課題の解決に向けた、本年度の試みをご紹介いたします。

民俗展示室のリニューアルオープン

民俗展示室では、平成21年より「きよせの自然展示室」というテーマで、人々と雑木林の密接な関係を解説しておりました。本展示は、自然保護活動に取り組む市民団体の協力を得て、3年を目処に開始したものです。昨年度に3年を迎えたため、本年度4月よりリニューアルオープンする計画が持ち上がりました。

新テーマは「農家の四季～武蔵野台地に生きる～」。武蔵野台地の特質に順応しながら、純農村地域として成長してきた清瀬の人々。その暮らしぶりについて、農作業、食生活、年中行事、人生儀礼、祭りといった視点から、季節の流れに従って紹介しています。清瀬における代表的な営みであった麦作・稲作を中心とした展示であり、地域性を端的にご理解いただけることと思われます。



リニューアルオープンした民俗展示室

「テーマ展示」新設

展示ホールでは、昨年度まで数年間にわたり養蚕資料および衣料を展示していました。リニューアルオープンに伴って、それらの展示は民俗展示室に集約されたため、展示ホールの展示替えも連動して行うこととなりました。

展示ケースを用いた、コンパクトサイズのこの展示スペース。ここでは、ケース内の展示物はある程度の安全が確保されること、展示替えが短期間で完了できる分量であることから、「テーマ展示」を新設することが決定。掲げたテーマに沿った収蔵資料により展示を構成し、1年間に展示替えを数回行うことを目途としています。

今年度は、「テーマ展示」として5月より「円通寺」を、9月より「家電のむかし展」を開催しました。

「円通寺」は、市内に現存する寺社で最も古いとされる円通寺を取り上げ、寺院の来歴や所蔵の指定文化財、人間国宝であられた前住職の故青木融光大僧正を紹介。

「家電のむかし展」は、学芸員実習の課題として実習生が作成した展示。昔の生活に関して学ぶため来館する小学生に供することを目的に、現在の家電製品が昭和時代後半にはどんな姿をしていたのか比較できる内容になっています。子ども向けの展示ということでキャプションもかなり易しいものとなっていますが、年配の方が「懐かしい」と喜んでご覧になる姿も度々みられました。

「テーマ展示」の開設後、「次はどんな展示ですか」「いつ頃に展示替えの予定ですか」と尋ねられるようになり、本コーナーを楽しみにご来館下さる方の存在がうかがえます。これからも「テーマ展示」の周知を図り、常設展示を目的とした来館の促進を目指していく所存です。

また「テーマ展示」では、これまで展示する機会になかなか恵まれなかった資料を中心に陳列したところ、「ずっと前の展示で見たこの資料をまた見たいと思っていたので、久々に展示されて嬉しい」「こんな資料がこの博物館にあったなんて驚いた」といった声が聞かれました。常設展示のリニューアルを契機として、普段は収蔵庫で眠りがちな資料を活用していく前途が開けたことは、良い相乗効果であったといえるでしょう。

一定以上の効果を齎した常設展示のリニューアル。しかし手つかずのままになっている常設展示スペースも多く、見直しは今後も継続していくべき課題といえます。

皆様にもっと活用していただける常設展示の在り方を模索しながら、邁進していきたいと考えています。

宣伝戦略、観覧者数の漸減
～日野市・市制施行50周年記念特別展を振り返って

日野市郷土資料館　中山弘樹

日野市は平成25（2013）年、市制施行50周年を迎えた。日野市はこれを記念して、昨年度と今年度、2回に分けて近現代日野市域の歩みを振り返る特別展を開催した。昨年度は明治以降、太平洋戦争の終結まで、今年度はそれ以降今日までの歩みを振り返ることとし、4つの会場（すべて自館でない!!）ごとに主題を設定、市の学芸員や市民グループで手分けして担当した。（図1）

今年度の特別展の開催を通して見えてきたことを、いくつか記しておきたい。

図1　特別展のチラシ表面

宣伝戦略は失敗か？ファミリーを魅了できず

今年度の特別展開催にあたっては、身近な地域の歴史をファミリーで振り返ってもらいたい、との想いが、これまで以上にあった。そこで、A4サイズ片面カラー・裏面モノクロのチラシを市内全校児童・生徒に、学校を通して配布した。（市内小学校17校・児童数約9,250名、市内中学校8校・生徒数約4,200名）配布時期は9月下旬。これとは別に、『ひのっ子教育』という教育委員会発行の教育広報誌（全校児童・生徒配布）にも展示概要は2回紹介した。（9月20日号、11月22日号）

学校で配布されたこれらの媒体を子供から受け取り、「じゃあ今度の休みはみんなで行ってみるか?」という展開を期待してのことだ。

しかし、結果はかなりみじめなもののように思える。観覧者数をかなり精度高くとらえられる2つの会場のデータを表1にまとめた。

	大人	中学生以下
高幡図書館会場	1,111 人	110 人
新選組のふるさと歴史館会場	1,822 人	366 人（団体見学 296）

表1　二つの会場の観覧者数（高幡図書館は若干の遺漏有）

新選組のふるさと歴史館会場には小学校4校が授業の一環として団体で見学に訪れた。それを除くと、2会場合わせて、中学生以下は190名弱。

高幡図書館会場で観察していると、児童だけで図書館に来たついでに見ていくという場面も見られなかったわけではない。しかし、回収されたアンケートも加味すると、熟年世代以上の観覧者が圧倒的多数を占め、子育て中の親世代と考えられる年代層はほとんど訪れていないようだ。ファミリーの心をがっちりつかむことには失敗したと言わざるを得まい。

しかし、紙の宣伝媒体そのものを保護者世代が眼にしていないわけではない。例えば、「昔の地層に触れ化石を探そう」というタイトルで『ひのっ子教育』に体験学習会の案内を掲載したところ、申し込みの電話が殺到した。

保護者の眼にも入ってはいるのだが、会場へ惹き付けられない・・・宣伝戦略以前の展示内容という本質的問題についてはここではひとまずおいて、チラシを配ればよいというものではないという、ある意味、当たり前のオチ。展示タイトル、キャッチコピー、チラシ・ポスターのレイアウト・配布時期の検討等、総合的な広報戦略・・・どこかで梅棹忠夫が広報を博物館の基幹に置くべきことを主張していたように記憶している。理念ではわかっているのだが・・・

今後、三博協で広報宣伝を中心に据えた研修会等をお願いできないものだろうか?各館の取り組みについても情報交換をしてみたいと希望している。

年々漸減する観覧者数

今年度も含め、当館は毎年秋に「新選組のふるさと歴史館」の展示スペースの一部を会場に特別展を開催している。展示に使用するスペースが同じ条件で比較可能な年度以降のデータを見ると、特別展の内容に関わりなく、年々観覧者数が減少してきている（表2）。「利潤率低下の法則」だの「窮乏化法則」だのをかつて喧々諤々した思い出があるが、「観覧者数漸減の法則」などとうそぶいている場合ではない。実にゆゆしき事態だ。

「新選組のふるさと歴史館」では、当館の特別展開催期間中にも、新選組に関わる常設展を開催している。観覧料の区分を行なっていないため、どの展示を目当てに来館したのか、正確なところはわからない。しかし、アンケート結果などからは過半数が新選組の展示観覧を目的としているようだ。新選組に関する常設展がスタートした平成22年度以降、常設展のアピール力が低下しているという事情もあり、入館者が減ってきているのが大きいだろう。

したがって、郷土資料館の特別展の内容・宣伝戦略のまずさのみが観覧者減少の原因ではないが、両館関係者で打開策を検討する必要があろう。

	1日平均観覧者数	会期日数
平成 22 年度	56.03 人	62 日
平成 23 年度	49.74 人	59 日
平成 24 年度	43.95 人	53 日
平成 25 年度	41.28 人	53 日

表2　特別展の年度別1日当たりの観覧者数

リニューアルオープンからの1年間

東京農工大学科学博物館　髙木愛子

1　リニューアルオープン一周年記念

東京農工大学科学博物館は、おかげさまで平成24年10月3日のリニューアルオープンから、無事一年を迎えました。そこで、10月5日には一周年記念として、学生サークルや大学教員による初のミュージアムコンサートなど、様々なイベントを開催しました。

この他にも、新生博物館の初年度として、色々な企画を積極的に展開した1年となりました。

アカペラサークルANITによるパフォーマンス

2　企画展・特別展

今年度は、特別展「シルクロードからの贈り物～ウズベキスタンにおける養蚕技術交流～」（3/16 ～ 4/13）を開催し、本学がJICA「草の根技術協力事業」により実施している、ウズベキスタン共和国での養蚕プロジェクトについて紹介しました。

続く企画展「未来を照らす光の科学」（6/1 ～ 9/28）では、本学の光学、量子光学を専門とする教員により、我々の生活にはなくてはならない光の様々な性質を実験・解説するとともに、それらを応用して行われている最先端の研究について紹介しました。

また多摩シルクライフ21研究会主催の「第9回東京シルク展」（10/25 ～ 27）を開催し、東京のシルク文化を守る人々の技術と活動を紹介し、台風接近にも関わらず多くの方々にご来館いただきました。

更に今年度から、博物館や学内に眠る資料を紹介する「ミニ企画展」を開始し、第一回目として工学部情報工学科の所有する「コンピュータコレクション展」（7/13 ～ 10/5）を開催しました。

この他、特別展「第32回東京農工大学科学博物館友の会サークル作品展」（2014/2/14 ～ 20）、企画展「衣料から医療へ～シルクで創る人工血管～」（2014/2/11 ～ 4/26）の開催を予定しています。

3　イベント

本館では、地域の小中学生に対する科学教育に貢献するため、「子供科学教室」を定期的に開催しています。今年度は「カイコの繭から糸を繰ってみよう！」「博物館で撮影会！」「親子でチャレンジ！手作りロボットレース」「子供に身近な動物教室」「2010年ノーベル化学賞に挑戦！クロスカップリング反応をやってみよう」「偏光フィルムを作ってサイエンスしよう！」の計6回実施しました。また、博物館友の会サークル活動の体験のできる講習会を計11回、毎月第3火曜日には繊維技術研究会による講演会を開催しました。

今年度はこれら定例イベントの他にも、多様なイベントを開催しました。5月18日の国際博物館の日には、航空研究会による「よく飛ぶ紙飛行機を作ろう！」を実施。学生サークルとの連携は初の試みでしたが、非常に手ごたえのあるイベントとなりました。また、友の会サークル活動の子ども向けの体験イベント「子ども体験教室」（8/27 ～ 30）を新たに開催し、自由研究の駆け込み需要もあり、多くの子ども達が参加してくれました。

更に、法政大学の小澤大二先生による講演会「琉球文化における染織」を開催し好評を得ました。今後は、外部から講師を招いての講演会も増やしていきたいと考えています。

4　博物館支援学生団体「musset」始動

当館には、博物館を支援する支援団体として「科学博物館友の会」と「繊維技術研究会」が長年活動を行っていますが、今年度から博物館支援学生団体「musset（ミュゼット）」が正式に加わりました。

主要活動と定めた来館者への展示ガイドの他、子ども向けの実験教室の開催や他館への見学会など、精力的に活動を行っています。中でも、学生サークルとの連携イベントの殆どがmussetからの発案であり、博物館とサークルの間に彼らが入ってくれたことで、調整もスムーズに進めることができました。設立1年目で全てが手さぐりの中も、mussetは確実に博物館へ新風を吹き込んでくれました。

来年度は、博物館、musset共に活動2年目を迎えます。マンネリ化することなく、更に支援団体や学生サークルと連携を深めながら、精力的な活動を展開していきたいと思います。

mussetによる展示ガイド

平成25年度の広報活動について

東京都埋蔵文化財センター　広報企画係

今年度の企画展示テーマは「縄文人のおしゃれ」でした。ここ数年、縄文時代に注目した展示をしてきましたが、「身を飾る」ことの意味や、縄文人の美的感覚を表現できればという試みでした。展示内容としては、小学生向けには、中央のスペースで装身具キットやお楽しみ箱を設置、興味を持って見てもらう工夫も行ないました。市原市の西広貝塚から出土した珍しい遺物も、多く借りてきて展示しました。

平成25年度展示「縄文人のおしゃれ」

また、今年度から新たに「今月の逸品」コーナーを始めました。月毎に多摩ニュータウン遺跡や都内の発掘調査で発見された、これはという「出土品」をシンプルに展示し、担当職員の「モノ」への想いを込めた解説文を加えています。ちょっぴり、大人向けの展示です。

人気の体験コーナーでは、縄文土器の立体復元パズルや平面パズルをはじめ、来館者の方にドングリの粉作りなどを体験する楽しみを味わっていただいております。

企画行事では、今年度も「縄文ワクワク体験まつり」を行い、2日間で1,000人以上の参加者がありました。体験コーナーでは、弓矢体験ブースの増設や「勾玉作り」の人数を増やしたところ、たいへん好評でした。

昨年から始めました「トンボ玉作り教室」はとても人気があり、今年は年間6回ほど実施しました。参加者の皆さんは、再度体験したいというご希望をもっておられ、トンボ玉製作の魅力が想像以上に大きいことをあらためて知りました。さらに、製作技術の向上を目指して、努力しなければと思います。

親子縄文土器作り教室（夏休み企画）

縄文ワクワク体験まつりー火おこし体験ー

12月には、新たに「遺跡庭園であったまろう！」を企画実施し、当日は100人以上の参加者がありました。センターに隣接する「縄文の村」の復元住居内での縄文生活の体験や、火おこし体験、焚火での焼きいもなど、子供も大人もしばしの間、大昔の生活を実感し、楽しんでいただけたようです。

「遺跡庭園であったまろう！」

集合住宅歴史館の活動報告

集合住宅歴史館　溝口　忠

1　はじめに

集合住宅歴史館は、独立行政法人都市再生機構技術研究所にある施設の一部で、戦前と戦後（昭和30年代）に建設された集合住宅の歴史を実物大で“見て・聞いて・学ぶ“ことができる施設です。また同じ敷地にある研究施設とあわせてご覧いただくと集合住宅のことをより深くご理解いただけます。

戦前の集合住宅で代表されるのは財団法人同潤会が建設した“同潤会アパート”です。同潤会は関東大震災復興のために義捐金により設立された組織です。同潤会は当時として貴重な鉄筋コンクリート造の集合住宅を東京と横浜に計16ヶ所建設しましたが、老朽化のため年々建替えが進み、今年の6月に“上野下アパート”が解体されたことにより現存する同潤会アパートはすべて姿を消してしまいました。集合住宅歴史館では平成21年2月に経済産業省から“近代化産業遺産”に認定された“同潤会代官山アパート”をご覧いただけます。

一方、戦後の集合住宅で代表されるのは日本住宅公団（現独立行政法人都市再生機構、UR）が建設した“公団住宅”です。日本住宅公団は戦後の住宅不足を解消するために行政機関の一部として設立された組織です。

集合住宅歴史館では公団設立初期に建設された“蓮根団地2DK”“晴海高層アパート”“多摩平団地テラスハウス”や“住宅設備の変遷”などをご覧いただけます。

晴海高層アパート

多摩平団地テラスハウス

2　施設見学の方法

施設見学の申込みはホームページまたは電話による事前予約制となっており、見学時は各グループに案内人が付き、見学者が希望する施設をご案内し、ご説明する方法で行っております。

平成25年度の施設公開は従来の公開日（火・水・木曜日の午後及び第2・第4金曜日の午後）から、月～金曜日の午後に日数を増やしております。

3　施設見学者について

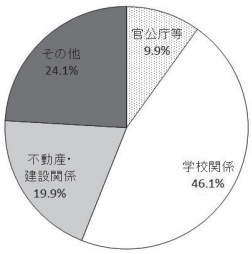
施設公開日数を増やしたことで11月末時点において、見学者数は前年比で25％強増加しており、公開日はほぼ毎日見学者が来場している状況です。

平成25年度11月時点での施設見学者を職種別に分類すると、学校関係が一番多く（46.1％）、次いで不動産・建設関係（19.9％）、官公庁等（9.9％）と続き、その他は24.1％となっておりました。

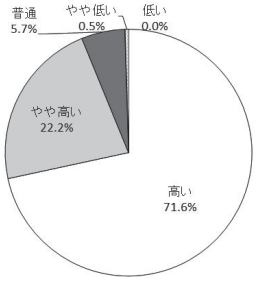
見学目的としては公的機関を含む企業関係の方は研修の一環として他の研究施設を見学し、その流れで集合住宅歴史館を見学するケースが多くみられます。一方、教育機関では企業関係者同様の目的も多いですが、大学等の教職員の講義または研究の一環として学生が集合住宅の歴史を学ぶために見学されるケースが多くみられました。

4　施設見学者からの評価

施設見学の方々には簡単なアンケート調査にご協力いただき、見学した施設ごとに満足度を5段階で回答いただいております。中でも集合住宅歴史館の満足度は“高い”と“やや高い”を合わると93.8％の方から高い満足度が得られ、当研究所6施設の中でも特に人気がある施設となっております。



見学者の業種



見学者の満足度

3月でハタチになります！

多摩六都科学館　安倍覚子

多摩六都科学館は今年3月1日に開館20周年を迎えます。これから1年にわたり、20周年を記念した企画を行う予定です。昨年11月から始まった20周年企画の一部をご紹介します。

（1）「宇宙の謎に挑む素粒子物理学～どうして現在の宇宙は生まれたか～」（平成25年11月30日開催）

ノーベル賞受賞者の小林誠氏、益川敏英氏を迎えた講演会、シンポジウムが20周年イベントの最初を飾りました。両博士のノーベル賞受賞5周年という記念の年ですので授賞式のあった11月の開催としました。前半は小林氏の特別講演に引き続き、若手の研究者である中山浩幸氏、坂下健氏（ともに高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所助教）の講演、後半は益川博士も加わり、髙柳雄一当館館長がコーディネーターを務めて、参加者からの質問に答えながらのパネル討論を行いました。本会場であるプラネタリウムドーム（定員234席）の他に、イベントホール（100席）をサブ会場とし生中継にて事前申込当選者の観覧場所とし、前半の講演部分は、同時にUSTREAMにアップしました。

「宇宙の謎に挑む素粒子物理学」シンポジウム

（2）1月25日には、20周年にちなみ、「20歳のプラネタリウム」と題して、今年度20歳になる方を招待し特別プラネタリウムを投映。育ってきた20年間を振り返る機会となるひとときを提供します。

（3）開館記念日の3月1日には記念式典を行います。

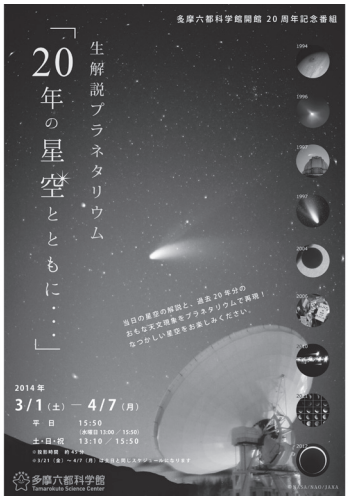
3月1日、2日は、館内で盛りだくさんな科学体験イベントを、庭では、太陽観望会やステージ、グルメフェスティバルを開催し、20周年を祝うことにしています。初めての試みとして、無料シャトルバスも運行。

開館20周年記念イベント案内

アクセスに問題のあった方にもぜひご来館いただきたいと思っています。この2日間は、当館を運営する小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市に在住、在学、在勤の方は入館料が無料になります。

（4）3月15日からは、春の特別企画展「くらしの中の20のしくみ展」を開催。生活の中で便利に使っているものの「しくみ」にスポットを当てます。ブラックボックス化したものの中身を体験を交えて学ぶことで、生活と科学のつながりを実感していただきます。

（5）「最も先進的」として世界一に認定されている当館のプラネタリウムは星空の解説と2か月ごとに変わるテーマで「生解説」をしており、たいへん人気があります。3月1日から4月7日はテーマを「20年の星空とともに…」とし20年間の天文現象を中心に解説。お客様それぞれの思い出がよみがえるようなプログラムを企画しています。



「20年の星空とともに…」案内

今後の20年も地域の皆様に愛される科学館としてあり続けられるよう運営をしてまいります。どうぞよろしくお願いします。

平成25年度ハンセン病資料館活動報告－展示活動を中心に－

国立ハンセン病資料館学芸課　田代　学

1　企画展

平成25年度も2回の企画展を開催しました。

春季企画展は5月11日～ 8月11日の会期で「一遍聖絵・極楽寺絵図にみるハンセン病患者－中世前期の患者への眼差しと処遇－」を開催しました。今回の展示では①近代以前を扱ったテーマでの企画展であること、②文化財を借り受けて展示したこと、の2点において当館においては初めての試みでした。

前近代ではハンセン病患者の姿は史資料も断片的で各時代の差別・偏見の実相を窺い知ることが困難です。そこで、中世前期（鎌倉時代）に「癩者」を含む当時「非人」として総称された被差別民の有りようについて垣間見ることができる一遍聖絵、「非人」を組織して社会事業を行ったと言われる忍性の極楽寺の寺域を描いた絵図から、中世前期のハンセン病患者の姿を考えようと試みました。一遍聖絵は「癩者」であろう人が描かれている場面の絵図を拡大して展示し、極楽寺絵図を拡大したパネルには描かれている建物の解説を加えて展示しました。拡大した絵をじっくり鑑賞する来館者の姿が見られました。会期中には神奈川県指定文化財『一遍上人縁起絵』（清浄清光寺蔵）の実物を、6月22日～ 7月5日まで展示し、鎌倉市指定文化財『極楽寺絵図』（極楽寺蔵）の実物は全会期を通じて展示しました。また鎌倉時代のものと思われる極楽寺の出土遺物である瓦や箸、建築資材なども鎌倉市教育委員会から借り受け展示しました。一遍聖絵を目当てにした来館者からハンセン病を初めて知ったという反応もあり、無関心だった人に知らせるきっかけともなりました。

秋季企画展は10月5日～ 12月27日の会期で「想いでできた土地－多磨全生園の記憶・くらし・望みをめぐる－」を開催しました。当館に隣接するハンセン病療養所多磨全生園の敷地には、入所者の歴史が刻まれた史跡や、現在の生活と医療を支える建物が数多く存在しています。今回はその中から63ヶ所のポイントを選び、パネルにして紹介しました。合わせて同内容のガイドブックも発行しました。この企画展の趣旨は、来館者には展示を見るだけにとどまらず、実際に園内に足を踏み入れることで、入所者がこの場所をいかに大切に思っているかを知り、また自分なりの価値を発見してもらおうというものです。そこから入所者との個人的な人間関係が築かれることを願って企画しました。会期中には付帯事業としてフィールドワークを6回開催しましたが、いずれも盛況でした。しかし一方で課題も感じました。フィールドワークの参加者からは「入所者とどうすれば交流できるのですか」「何か入所者に関わるボランティアはないですか」という質問が出た時に、何も応える術がなかったということです。入所者と社会とのつながりを求める場合に、ハンセン病療養所とどこまで連携していけるのか、館としてその具体的な活動をどこまで広げるかという点で、考えさせられる機会ともなりました。

2　20周年記念事業

当館は1993（平成5）年6月25日に開館し、2013年（平成25）年に開館20周年を迎えました。これを記念し6月25日を中心に様々なイベントを開催しました。6月25日は当館映像ホールで「開館20周年記念式典」が開催され、関係者76名が参集しました。続いて「大谷藤郎初代館長胸像除幕式」を当館ロビーで開催しました。胸像はハンセン病政策における大谷初代館長の功績をたたえて澄川喜一（元東京芸大学長）によって制作され、当館が多磨全生園入所者自治会から借り受けロビーで展示することになったものです。

6月25日～ 7月28日までは当館ギャラリーで記念展を開催しました。20年間の活動を「存在意義を継ぐために知る、活動の記録」と題し、1992年の設立準備段階から今日までの活動を写真50点と発行物や文書で振り返りました。6月27日には講演会を開催しました。多磨全生園コミュニティーセンターにおいて日野原重明氏をお招きし、「ハンセン病の患者に生涯を捧げた神谷美恵子医師の生き方」をテーマにお話していただきました。約300人の参加者があり盛況でした。7月7日、8日には開館当時に全国の療養所が自らを紹介するために制作し、当館へ提供したビデオの上映会を行いました。11月9日には登壇者の体調不良のために延期していた座談会を開催しました。「資料館の設立、活動、これからへの期待を語る」をテーマに、当館の設立に深く関わった大竹章氏、佐川修氏、成田稔氏、平沢保治氏、山下道輔氏からお話をうかがいました。

さらに入所者数が少なくなっていくであろうこれからの10年に向け、「同じ過ちが繰り返されないように社会に訴える」、「生き抜いてきた証を残す」、「患者・回復者の名誉回復を図る」という3つの理念を自覚しながら活動をしていきたいと考えています。

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」 西口下車徒歩8分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」 北口・京王線「京王八王子駅」 からバス「市民会館」 下車
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」 から「郷土の森総合体育館」 行きバス「郷土の森正門前」 下車
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」 から藤野台団地行きバス「市立博物館前」 下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」 下車徒歩15分
調布市郷土資料館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」 下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑1962	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」 東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」 から小河内方面行きバス「奥多摩湖」 下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」 東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」 から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」 下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920-1	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」 下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」 西口下車徒歩20分／コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」 下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」 北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」 南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」 下車徒歩5分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」 から藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」 から百草団地方面行きバス「高幡台団地」 下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」 北口からココバス北東部循環⑬「小金井公園入口」 下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」 下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」 から西武バス（イオンモール行き） で「八幡神社」 または都営バス（青梅車庫行き、箱根ヶ崎行き） で「八幡神社前」 下車徒歩2分／多摩モノレール「上北台駅」 からちょこバス外回り「八幡神社」 下車徒歩2分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」 下車徒歩5分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」 南口下車徒歩9分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」 北口から西武バス「小金井公園西口」 か関東バス「江戸東京たてもの園前」 下車徒歩5分
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」 南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」 下車徒歩20分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」 下車徒歩5分
集合住宅歴史館（都市再生機構都市住宅技術研究所）	八王子市石川町2683-3	042-644-3571	JR八高線「北八王子駅」 より徒歩10分／「JR八王子駅」・「京王八王子駅」より西東京バス、大和田・東海大学病院経由宇津木台行き「ケンウッド前」 下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」 北口下車徒歩18分／西武新宿線「田無駅」 北口からはなバス「多摩六都科学館」 下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」 南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」 下車
コニカミノルタサイエンスドーム（八王子市こども科学館）	八王子市大横町9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」 北口から西東京バス「杏林大学」・「戸吹」・「みつい台」 行き等「福祉会館」 下車徒歩2分
国立天文台天文機器資料館	三鷹市大沢2-221-1	0422-34-3962	JR中央線「武蔵境駅」 から小田急バス「狛江駅」 行き「天文台前」 下車／京王線「調布駅」 から小田急バス「武蔵境駅」 南口行き「天文台前」 下車
首都大学東京91年館	八王子市南大沢1-1	042-677-1111	京王相模原線「南大沢駅」 下車徒歩5分
狛江市立古民家園（むいから民家園）	狛江市元和泉2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」 より徒歩10分／小田急線「狛江駅」 北口より「多摩川住宅」行バスで「児童公園」下車

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩　No.35

発行日　2014年3月31日

発行　東京都三多摩公立博物館協議会
2013年度会長　東大和市立郷土博物館
東大和市奈良橋1-260-2　042-567-4800

編集委員　江戸東京たてもの園：高橋英久
東大和市立郷土博物館：浜田恵美
東京農工大学科学博物館：髙木愛子
パルテノン多摩歴史ミュージアム：乾賢太郎